

府中市埋蔵文化財調査報告 第244集

武藏国府関連遺跡調査報告

「白糸台4丁目宅地造成工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

(1964次)

2025. 3

トキ才文化財株式会社

府中市埋蔵文化財調査報告 第244集

武藏国府関連遺跡調査報告

「白糸台4丁目宅地造成工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

(1964次)

2025. 3

トキオ文化財株式会社

例　言

1. 本書は、東京都府中市白糸台4丁目9番17号他に所在する、武藏国府関連遺跡（府中市No.2）の調査報告書である。
2. 本調査地区は、「武藏国府関連遺跡」の白糸台地域に位置し、府中市が管理する市内発掘調査の通次数では1964次調査にあたる。
3. 本調査は、宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の事前調査である。
4. 本調査は、事業者である大和ハウス工業株式会社と、府中市教育委員会および調査機関であるトキオ文化財株式会社の三者間で協定書を締結し、埋蔵文化財取り扱いの措置、発掘調査の実施方法などを定め、府中市教育委員会の指導のもと、トキオ文化財株式会社が実施したものである。
5. 発掘調査から報告書作成までの費用は大和ハウス工業株式会社が全額負担した。
6. 本調査は、有吉重蔵（トキオ文化財株式会社）を調査担当者として、令和5（2023）年11月20日から令和6（2024）年2月19日まで現地調査を行った。整理調査および報告書作成は令和6（2024）年2月20日からトキオ文化財株式会社聖蹟整理事務所にて行い、本書の刊行をもって終了した。
7. 整理調査における遺構図面の整理・トレースは、大津美衣里が、遺物の実測は齋藤京子・高田彩子・土田雅美・矢花正之が、遺物の写真撮影は土田が行った。
8. 本書の執筆は、第1章第1節を湯瀬禎彦（府中市教育委員会）が、第2章第2節縄文土器を高林 均（トキオ文化財株式会社）が、第3章をパリノ・サーヴェイ株式会社が、その他を有吉重蔵が行った。遺物観察表作成は、古代以降を有吉が、縄文土器を高林が、石器を矢花が行った。
9. 本調査で出土した骨および土壤分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。その成果は「第3章 自然科学分析」に掲載した。
10. 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会発行の『府中市埋蔵文化財調査報告 第〇〇集』は『報告〇〇』と、『武藏国府の調査〇〇』は『概報〇〇』と、『武藏国府 一府中市遺跡調査会年報昭和〇〇年度-』は『年報〇〇』と略記した。
11. 本調査において出土した遺物および作成した記録類は、府中市教育委員会において収蔵保管している。
12. 発掘作業から整理作業・報告書刊行作業にあたり、下記の諸氏・諸機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略・順不同）。

荒井健治　中山真治（三鷹市教育委員会）　深澤靖幸（府中市郷土の森博物館）

小池雄利亜（株式会社K o i k e）　横山　真・千葉　史（株式会社L A N G）

有限会社K E L E K　加藤恭朗（国際文化財株式会社）

黒渕和彦・青池紀子（大成エンジニアリング株式会社）

【調査体制】

調査指導 湯瀬禎彦（府中市教育委員会）
調査機関 トキオ文化財株式会社
調査担当 有吉重蔵
調査員 藤代聖一

発掘・整理作業参加者

石川太郎	伊藤洋平	江口真裕	大津美衣里	大橋正信	小川有子
奥村美里	嘉代俊彦	川原裕子	齋藤京子	佐藤 徹	鈴木 慧
高田彩子	高林 均	田代直也	田中 伶	土田雅美	中山弘人
野村雅美	宮崎博史	矢野聖次	矢花正之（トキオ文化財株式会社）		

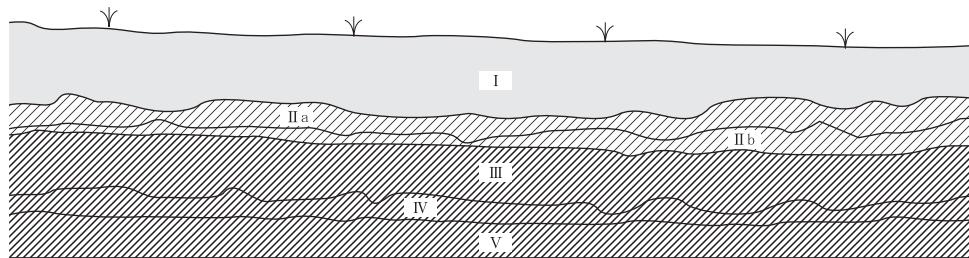
凡 例

1. 府中市の基本土層について

府中市の遺跡の基本土層は、『報告1』で規定されて以来、表土層（I層）からハードローム層（VI層）まで順にローマ数字で表記されるようになっている。ローム層以上の黒土層を4ないし5層に細分が進んだが、そのため武藏野標準土層との相違が生じている。府中市内の遺跡では、現在でも基本的には報告1の府中層位名で記載しているが、旧石器時代の遺物の検出された調査地区において旧石器時代の包含層（文化層）を調査する際、ソフトローム層以下については現状では一般的な武藏野標準土層で表記することにしている。本書では以下に立川段丘平坦面の標準的な土層断面を図示した。

層序	色調	特徴	層厚	時代（包含する遺物）
I層	灰褐色土	市街地ではややサラサラする耕作土	30～50cm	近世～近・現代
II a層	暗褐色土	市街地では黒色味が弱い	10～20cm	古代～中世
II b層	暗褐色土～黒褐色土	スコリア質でボソボソする	5～15cm	古墳時代～古代
III層	濃褐色土	（武藏野II b層）市街地では軟質・褐色を呈する	30～35cm	縄文時代（中期）
IV層	黄褐色土	（漸移層）赤色スコリアを多量に含む	10～15cm	縄文時代（早期）
V層	黄褐色土	（武藏野III層・ソフトローム層）	10～25cm	旧石器時代

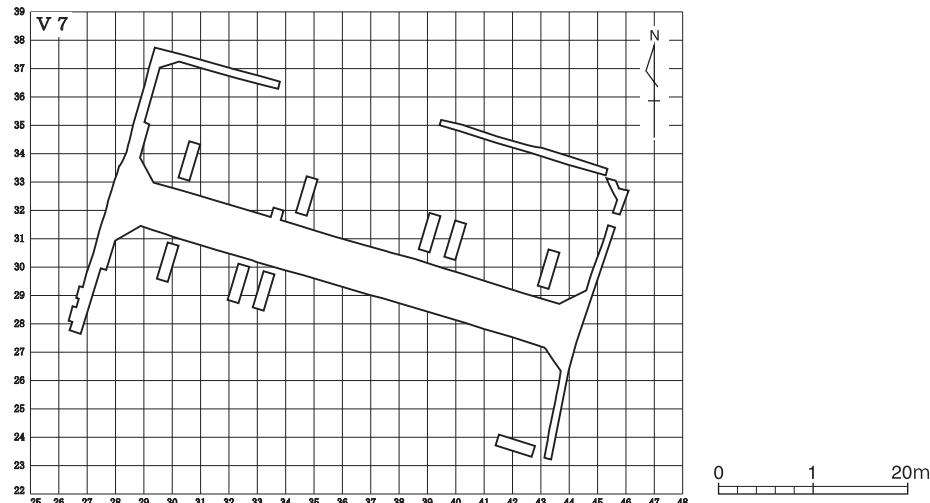
武藏国府関連遺跡 基本層序（立川段丘平坦面）土層断面図 府中町2丁目付近



2. 調査地区の位置について（グリッド）

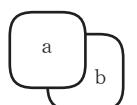
調査地区の位置表示にあたっては、府中市遺跡調査会独自のグリッドを使用している。これは、府中市を大きく24区画（A～Z、大グリッド、ただしI・Q欠番）に分け、さらにそれぞれの大グリッドの中を100区画の中グリッドに分けていている。例えば全体図に付けている「V 7」は、「V」が大グリッド、「7」が中グリッドを示している。これにより、府中市内でのおおよその位置が確定する。さらに中グリッドは3mごとに小グリッドのラインがあり、一辺を50等分している。これにより正確な位置が割り出せる。全体図は小グリッド網から切り取った状態で表示している。また、この方眼の原点は、平面直角座標系9系を使用しているためグリッドに対して国家座標を取り付けることが可能であり、方位は方眼北を指す。

今回の調査地区はV 7グリッドに位置し、遺構名の前にグリッド名を記載している。

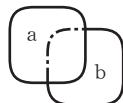


3. 全体図・遺構個別図について

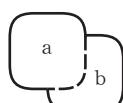
①遺構の重複関係の表示は原則として次の通りである。



明らかに a が b を切り、 b が壊されている。



a が b を切っているが、 a の下に b のプランが確認された場合。



a が b を切っているが、 プランでの確認ができず想定ラインで示した場合。

②図中のトーン・ライン等については次の通りである。

(平面図)

○ 搅乱のライン -- 個別図の搅乱の接点を示すライン —— 想定のライン

--- 床の硬化部分を示すライン

■ 竪穴建物跡貼り床

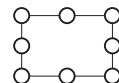
■ 竪穴建物跡貼り床

■ 烧土

■ 烧土・炭化物

(断面図)

■ 地山



建物・柵等の柱のつながりを示すライン

③その他の表記について

遺構平面図・断面図で使用した標高はT.P. (Tokyo Peil) である。

4. 遺構

①遺構番号について

遺構番号はそれぞれ次の記号で表わされている。

S A = 柵跡, S B = 掘立柱建物跡, S D = 溝, S F = 道路跡, S I = 竪穴建物跡, S K = 土坑, S X = その他の遺構, S Z = 墓

そして、中区画ごとに連続した番号を付けている。たとえば 1964 次調査の “V 7 - S I 3” は V 7 区画の竪穴建物跡の 3 番目を示している。

②遺構写真について

各写真キャプションに付く（方位）は撮影した方向を示す。

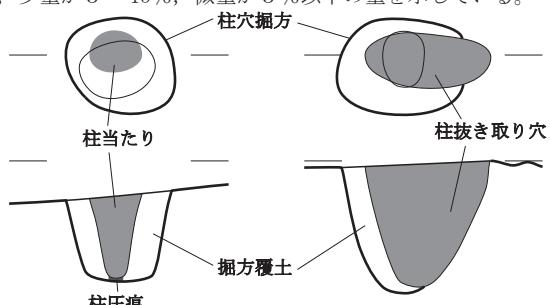
③遺構図土層注記について

各遺構の土層注記に関しては、各遺構図の近くに記している。

なお、主体となる土とは、その土層中最も多い土を指す。混入する土については、多量・中量・少量・微量と 4 区分している場合は、多量が 30 ~ 50%, 中量が 15 ~ 30%, 少量が 5 ~ 15%, 微量が 5 % 以下の量を示している。

④掘立柱建物跡柱穴の各部の名称について

柱穴の各部の名称については、右図の通りである。



5. 遺物

①遺物の番号については以下の表記を使用した。

- ・縄文土器
J001～
- ・古代の土器、近世以降の陶器
1001～
- ・その他の遺物
土製品=Y001～ 鉄製品=M001～ 石器・石製品=Q001～

②実測図の表現について

- ・これらの種類は断面のトーンにより区別している（図示した以外のものは無地である）。
- ・遺物実測図の表現方法は基本的に府中市遺跡調査会刊行の報告書を参考とし、調整技法の表現は一般的な表現方法を採用した。

③実測図の縮尺について

- ・縄文土器、古代の土器、近世の陶器 1/3 土製品 1/2
- 鉄製品 1/2 石器 原寸, 1/2, 1/3 石製品 1/3

④縄文土器の分類については、以下の文献を参考にした。

- ・小林謙一他 2016『シンポジウム縄文研究の地平 2016－新地平編年の再構築－発表要旨』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会

⑤遺物の観察表について

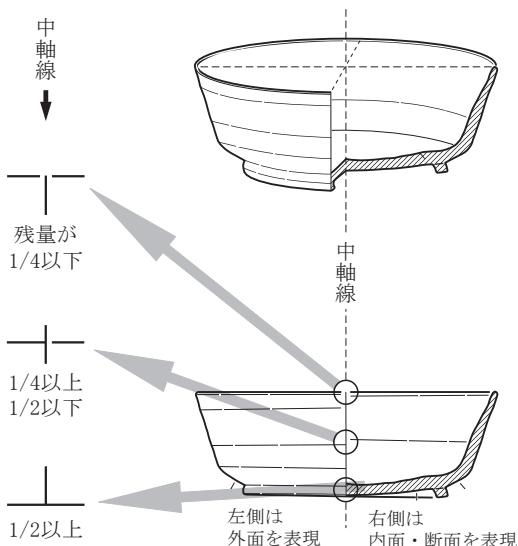
- ・法量(cm)の内容は次の通りである。
土器→上段=口径、中段=器高、下段=底径、()は現存値、[]は推定値を示す。
須恵器等の最下段(四段目)は「内底径」を示す。
また、上記に当てはまらないものは、数値の前に計測位置を示した。
- ・色調は、『新版 標準土色帖 2018年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に拠った。

⑥写真について

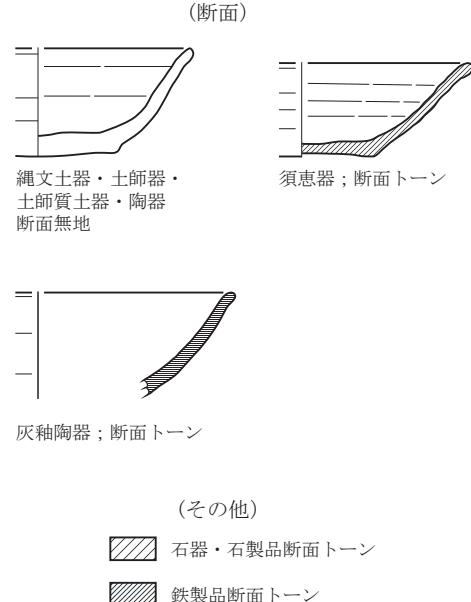
- ・遺物写真の縮尺は基本的に遺物実測図に準じた。

⑦実測図の表現方法について

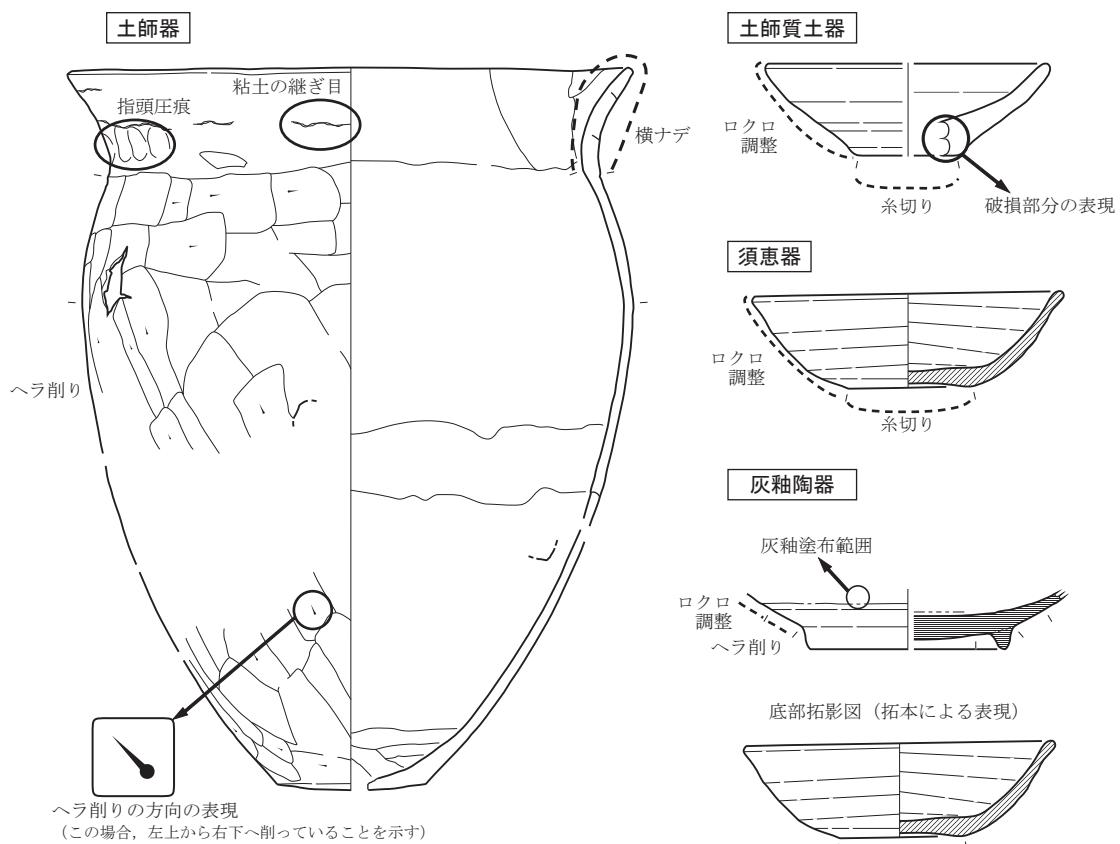
- ・残存の表現



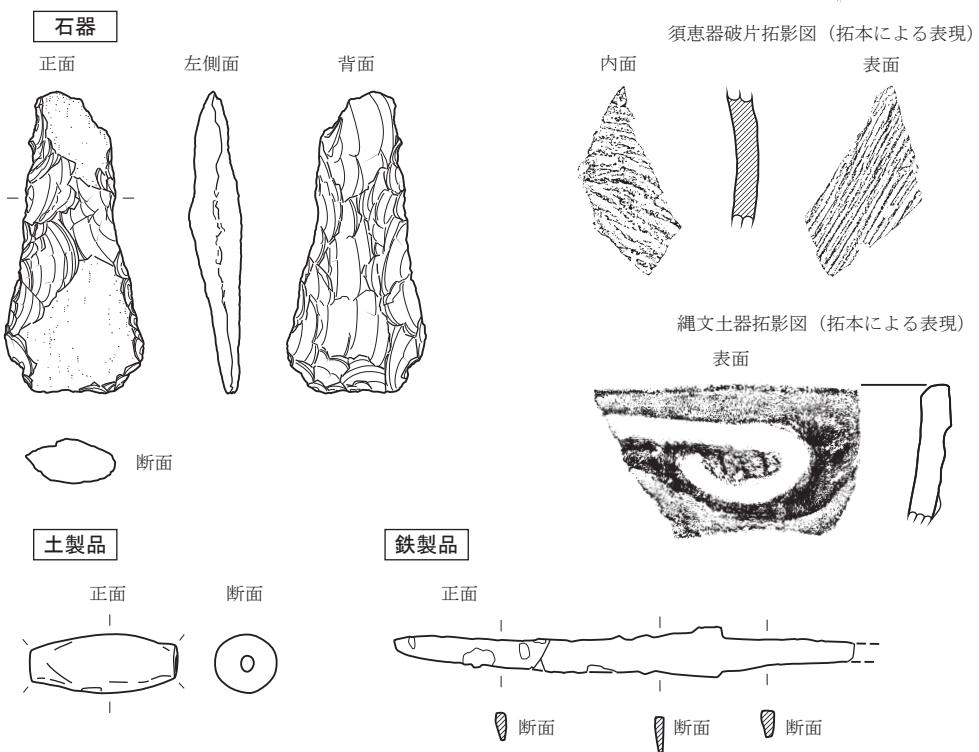
- ・トーンによる表現



⑧バーを境とする作り方の違いの表現



その他の遺物実測図の表現方法について



武藏国府関連遺跡調査報告

「白糸台4丁目宅地造成工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

目次

例言・凡例・目次

第1章 調査の概観	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査地区の位置	2
第3節 近隣の調査地区	3
第4節 調査の経過	8
第5節 基本土層	9
第2章 遺構と遺物	11
第1節 調査の概要	11
第2節 縄文時代	12
1. 土坑	12
2. その他の遺構	13
3. 小穴	17
4. 遺構外出土遺物	17
第3節 古代・中世	20
1. 壇穴建物跡	20
2. 掘立柱建物跡	25
3. 墳墓	27
4. 土坑	29
5. 溝	32
6. その他の遺構	33
7. 小穴	35
8. 遺構外出土遺物	35
第3章 自然科学分析	36
第4章 まとめ	41
第1節 武藏国府関連遺跡東側（白糸台地域）の古代集落跡の様相について	41
第2節 石囲い火葬墓（V 7-S Z 4）について	45
引用・参考文献	54

別表	56
図面	75
図版	113
報告書抄録	

第1章 調査の概観

第1節 調査に至る経緯

当調査地区は、東京都府中市白糸台4丁目9番17号他に所在し、『武藏国府関連遺跡』の埋蔵文化財包蔵地にあたる。

令和5年に当地においては、既存建物を解体し、その跡地を宅地造成する計画が立ち上がり、同年6月21日に大和ハウス工業株式会社（以下「大和ハウス工業」と表記）より、文化財保護法第93条第1項に基づく発掘届が府中市教育委員会（以下「市教委」と表記）へ提出された。これに対し、市教委及び東京都教育委員会（以下、「都教委」と表記）は、周辺地域の調査で古代を主体とする時期の遺跡が確認されていることから、試掘調査が必要であると判断した（都通知 5教地管埋第1275号）。

試掘調査は令和5年9月11日から13日にかけて市教委が行った。その結果、古代の堅穴建物跡などの遺構が当地内で広く分布することが確認されたため、市教委は大和ハウス工業に対し、工事着手前に本調査が必要となることを通知した（5府文ふ第1号の85-4）。

本調査にあたっては、大和ハウス工業より、民間調査組織であるトキオ文化財株式会社（以下、「トキオ文化財」と表記）に依頼したいとの申し出があり、後日、トキオ文化財より当該発掘調査についての実施計画書が市教委に提出された。当実施計画書をもとに、令和5年10月24日付で、大和ハウス工業、市教委、トキオ文化財の三者間による埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結するとともに、トキオ文化財より文化財保護法第92条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された（都通知 5教地管理第2923号）。

こうした経緯のもと、令和5年11月20日にトキオ文化財が現地の発掘調査を開始した。

（府中市教育委員会 湯瀬禎彦）

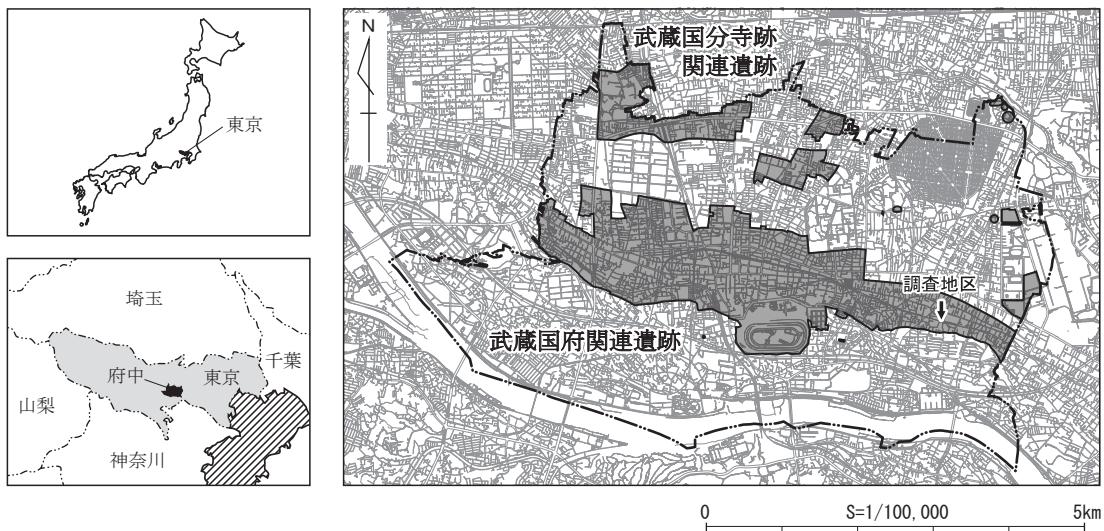
第2節 調査地区の位置

今回の調査地区は、東京都府中市白糸台4丁目9番17号他に所在する。京王電鉄京王線武蔵野台駅の下りホーム西側部分に沿う市道を挟むように位置しており、調査地区の東に市道を挟んで第683次調査地区がある。この地点は、府中市の「武蔵国府関連遺跡」（府中市No.2）東端部の白糸台地域に当たり、さらに周囲には群集墳を構成する古墳が点在している。

府中市は、市の南端を東流する多摩川の中流域左岸に位置し、地形的には多摩川によって形成された河岸段丘と旧河道の低湿地および自然堤防などの微高地からなる沖積低地に分かれる。市域の南側は沖積低地、その北側には比高7～8mの「ハケ」と呼称される府中崖線を境として、南北幅約2.5kmの立川段丘が概ね平坦な面を形成している。さらに市の北西部では、立川段丘の上位段丘である武蔵野段丘が比高約10mの国分寺崖線と呼ばれる段丘崖によって立川段丘と明瞭に画されており、北西から東もしくは南東へと続く。市域はこの武蔵野段丘面の一部に及んでいる。

武蔵国府関連遺跡は、府中崖線に沿った立川段丘上から一部沖積低地にまで広がりを見せ、東西約4.4km、南北は最大1.8kmほどの広大な面積をもつ遺跡群である。この遺跡群の東端部の白糸台地域内に今回の調査地区があり、府中崖線から北へ約130m入った立川段丘上に立地する。また、この遺跡群に包括される遺跡として縄文時代中期後半の住居跡数軒が検出されている遺跡が白糸台6丁目に、さらに古墳時代後期（5世紀後半～7世紀）の円墳を主体とする群集墳である白糸台古墳群が白糸台4・5丁目にある。

なお、今回の調査地区は府中市教育委員会が市域調査の際に用いるグリッドのV7区に位置しており、V7区における5次の調査に当たる。府中市域全体における調査次数は「1964」次である。



第1図 調査地区の位置（1/100,000）

第3節 近隣の調査地区

本調査地区は、既に述べたように「武藏国府関連遺跡」東端部の白糸台地域に当たり、周囲には古墳が点在する（第2図）。白糸台地域では京王線武藏野台駅周辺地域と西武多摩川線白糸台駅の南側地域を中心に各種開発に伴う発掘調査が実施され、その都度報告書および概報として調査成果が報告されてきたが、その成果をまとめたものは無かった。このような中、令和元年（2019）から『新府中市史』の資料編が相次いで刊行され、縄文時代中期の白糸台遺跡と古墳時代後期の白糸台古墳群が『原始・古代資料編1』（府中市2019）に、武藏国府関連遺跡の白糸台地域が『原始・古代資料編3』（府中市2021）に収録され、その調査成果がまとめられている。そこで、市史を参考に近隣の調査地区の状況を見て行くことにしたい。

縄文時代の白糸台遺跡は概ね京王線武藏野台駅の東側に当たるが、集落の中心は不明ながら白糸台6丁目と隣接する5丁目の東部分で中期後半（加曾利E2～4式）の竪穴住居が検出されている（第974・1074・1126・1210次調査地区）。本調査地区の東側でも第3次調査地区で埋没谷が調査され、縄文中～後期の土器や大型石棒などが出土している。さらに、隣接する第683次調査地区でも中期後半（加曾利E3式）の屋外埋甕が検出されており、この付近が集落推定範囲の西端部に当たるようである。

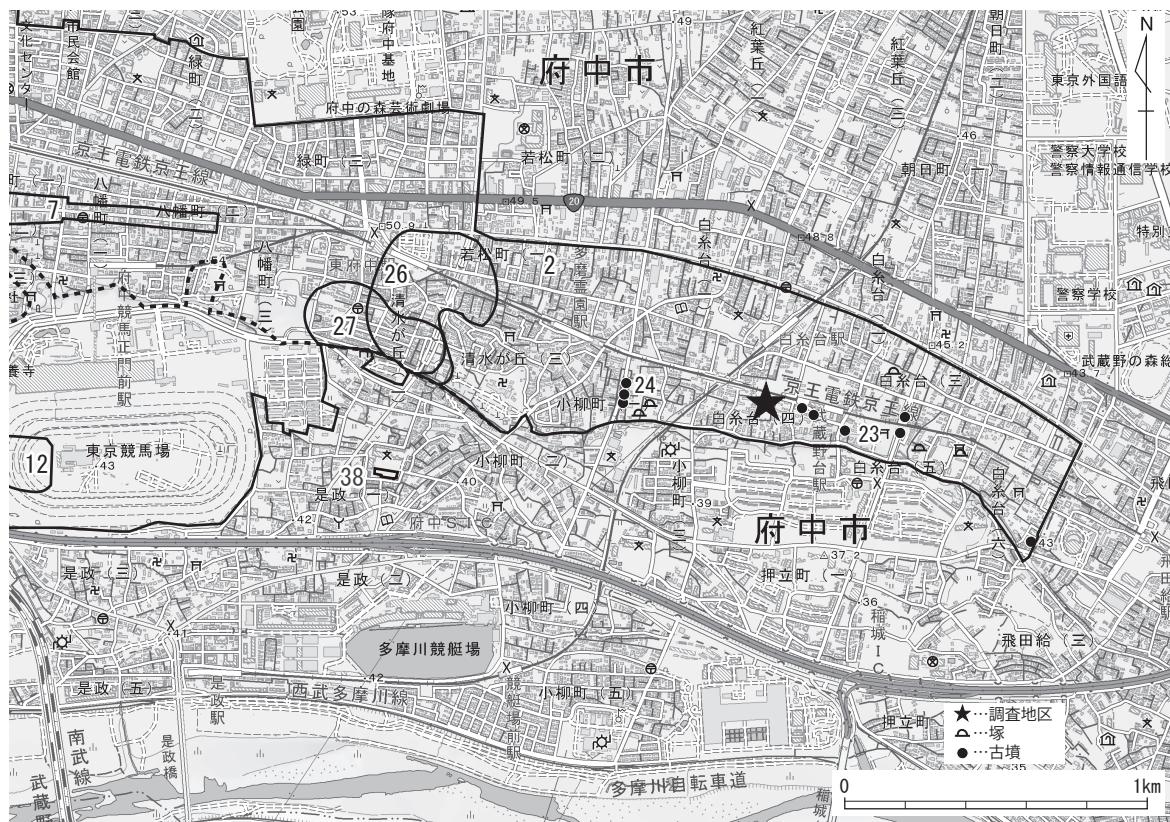
古墳時代の付近の古墳群は、京王線多磨霊園駅南側の小柳町1丁目付近から白糸台5丁目にかけての、府中崖線寄りに後期古墳を主体とする円墳15基が分布しており、武藏野台駅周辺にやや集中するようである。なお、調布市境の1基は調布市飛田給古墳群に関連するものと考えられている。これらの所属時期は、5世紀後半の1号墳（第5次調査地区）、6世紀前半～中葉の2（第22次調査地区）・3（第68次調査地区）・11号墳、7世紀前半の4・5（第683次調査地区）・9・10号墳であり、また主体部は4・5・10号墳の河原石敷床面を伴う河原石積横穴石室が明らかになっている。主な出土遺物は、1号墳の周溝出土の土師器壺・壺・甕、鉄鏃、2号墳の周溝ブリッジ付近から出土した土師器壺13点、高壺3点は土器儀礼に伴うものと考えられている。また、12号墳（調査地区）からは形象埴輪片が出土している。

このように、本調査地区周辺では円墳の墳丘が失われ、主体部や周溝が残存する古墳が意外に多いことが知られる。

当地域の主体をなす武藏国府関連遺跡東側の古代集落跡は、西側の清水が丘地域から白糸台・朝日町両地域を経て、調布市の飛田給遺跡まで切れ目なく連続すると考えられている。そして、この地域の遺構は、南側の府中崖線から北へ約300～400mの範囲で、崖線に沿って帶状に分布している。これらの特徴は、府中崖線の北約750～850mの地点に計画的に掘削された大型の共同井戸を伴う国衙を中心とする国府地域（東西約2.2km、南北1.8km）とは異なり、崖線下の湧水利用に依存した一般集落と考えられてきた。ところが、京王線東府中駅から武藏野台駅手前までの清水が丘地域では、都市計画道路2・1・4号線建設に伴う清水が丘遺跡の調査（153次調査地区）で竪穴建物跡8棟、掘立柱建物跡13棟、溝6条などが検出され、その中で梁行2間×桁行5間の布掘り掘方を有する掘立柱建物（N90-SB9）は、武藏国府関連遺跡内でも検出例が本事例を含めても7棟と少ない上に、さらに掘立柱建物が多く見られる特徴がある。また、当地域の竪穴建物の時期別変遷も、K期（7世紀後葉）～N2期（8

世紀前葉) をピークに H 2 期 (9 世紀前葉) にかけて減少し、その後 H 6 期 (10 世紀前葉～中葉) に向けて増加して再びピークを迎えるが、H 7 期 (10 世紀後葉) 以降激減する。この傾向は武藏国府域と同様であり、これらから当地域は武藏国府域東側地域の拠点的な集落と推定されている。

清水が丘地域に続く白糸台地域でも、堅穴建物の時期別変遷は武藏国府域と同様であるが、子細に見ると西武多摩川線白糸台駅付近～京王線武藏野台駅付近にかけて緻密な遺構の分布を示す地点が点在することが明らかになってきている。その主なものをあげるとまず西武多摩川線白糸台駅前の第 941 次調査地区がある。検出された遺構は堅穴建物跡 26 棟、梁行 2 間 × 衍行 5 間の大型建物を含む掘立柱建物跡 24 棟などがあり、掘立柱建物の多さが際立ってい



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種類	時代
2	武藏国府関連遺跡	片町 寿町 小柳町 清水が丘 白糸台 八幡町 府中町 分梅町 本宿町 緑町 宮西町 宮町 美好町 若松町 日吉町	台地・低地	官衙・集落	旧石器、縄文(早・前・中・後)、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
7	府中宿	宮西町一～五丁目 宮町一～三丁目 八幡町一・二丁目 片町二丁目 寿町一丁目 美好町三丁目 本町二丁目	台地	社寺・宿場	近世
12	日吉町遺跡	日吉町東京競馬場	低地	包蔵地・社寺	縄文(中)、中世
23	白糸台古墳群	白糸台四・五丁目	台地	古墳	古墳
24	No. 24 古墳	府中市	台地	古墳	古墳
26	清水が丘遺跡	若松町一丁目 清水が丘一～三丁目	台地	集落	縄文(早・中・後・晚)
27	清水が丘西遺跡	清水が丘一・二丁目 八幡町三丁目	台地	集落	古墳
38	府中第八小学校遺跡	是政一丁目	低地	集落・水田	中世

る。N 2 期に出現する堅穴建物は、N 3～N 4 期に増加するものの密集度が薄く、H 1 期以降の 9 世紀代になると掘立柱建物が集中して出現する。その後 H 6 期に堅穴建物が増加し、H 8 期（10 世紀末～11 世紀初頭）まで継続して営まれている。また、この調査地区の北東約 100 m の第 975 次調査地区では、国衙から国府域外に延びる主要な東西道路の東延長に当たると推定される、最大路面幅 8 m の側溝を伴う東西道路跡が検出されている。さらに、約 500 m 東方の京王線武藏野台駅周辺でも第 698 次調査地区では掘立柱建物跡が集中し、第 980 次調査地区では灰釉陶器・緑釉陶器・白磁が出土している。これらから、当地域に東西道路沿いに展開した官衙的色彩の強い国府東方の拠点的な集落が展開していたと考えられている。もっとも、京王線武藏野台駅～調布市境までの間は一般集落の様相が強くなるようである。

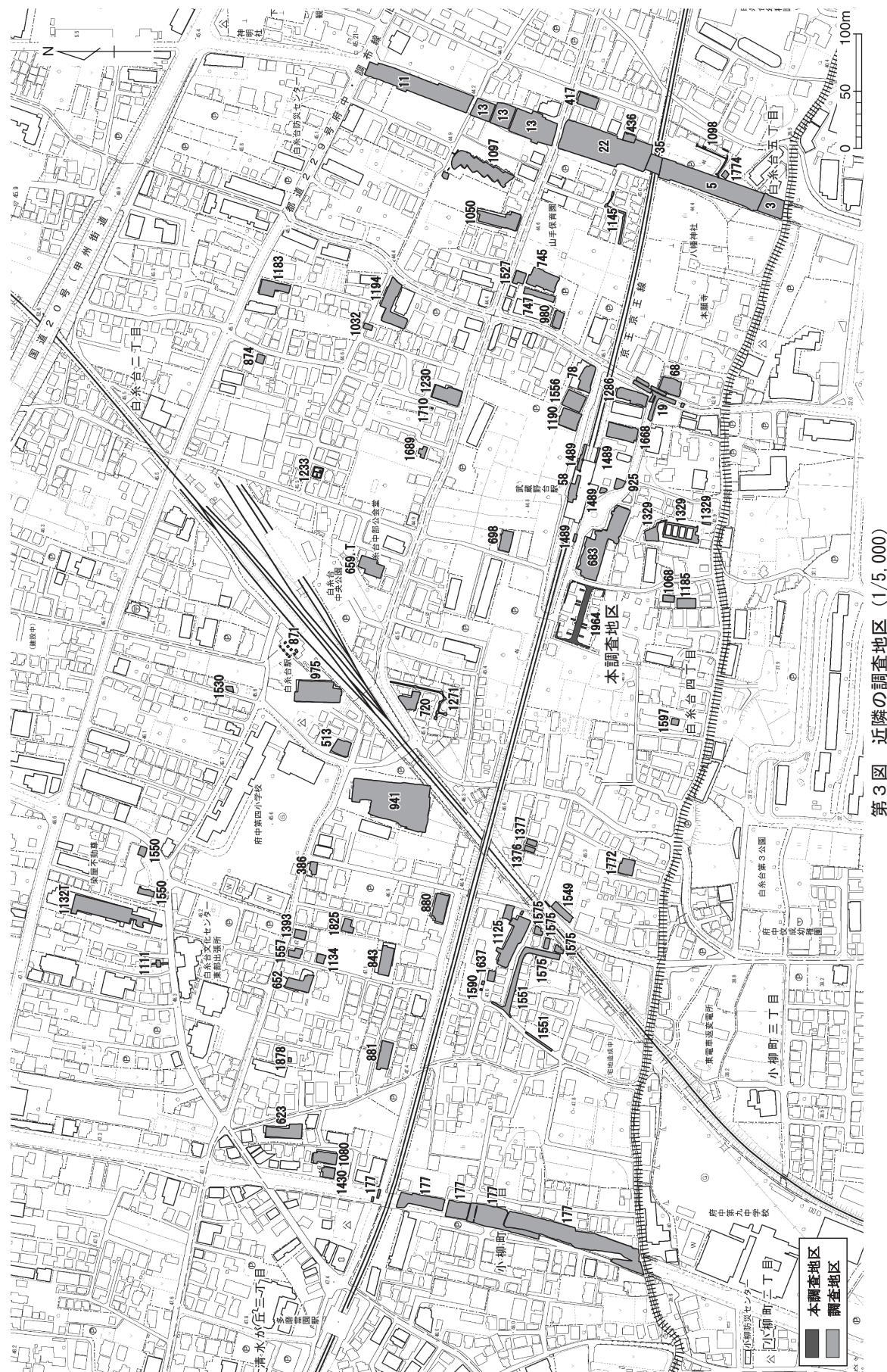
今一つ当地域の特徴としてふれておかなければならぬものに墳墓（L 字墓 5 基、火葬墓 2 基）がある。L 字墓は第 177 次調査地区で検出され、南北に長い方形または楕円形土坑の一方の側面下部を掘り広げたもので、各々 2 基がある。さらに、南北に長い方形土坑の東側側面下部を掘り広げ、底面に拳大の円礫を敷き詰めたものが 1 基ある。いずれも出土遺物は無いが古代に属すると考えられている。火葬墓は第 22 次調査地区で 1 基検出されている。土師器甕を骨蔵器とするもので、土坑に直立状態で置かれ、その上部に同形態の土師器甕を蓋に用いたようで、所属時期は H 6 期と考えられている。今一つは京王線多磨靈園駅の東約 100 m に位置する第 177 次調査地区的もので、南北 70 cm × 東西 65 cm の方形掘方底面に炭化物を少量含む土を 10 cm ほど充填し、その上に骨蔵器の土師器甕を倒立に置いたものである。所属時期は N 3 期と考えられている。

第 2 表 近隣の調査地区一覧表（1）

通次数	現場名	グリッド	調査面積 (m ²)	掲載報告書	遺構数								
					S A	S B	S D	S E	S F	S I	S K	S X	S Z
3	府中市都市計画道路 2・2・12 号線 第 1 次	V 20	321.2	『報告 1』	0	0	0	0	0	0	3	0	0
5	府中市都市計画道路 2・2・12 号線 第 2 次	V 10 V 20	1418	『報告 1』	0	1	9	0	0	2	3	1	1
11	府中市都市計画道路 2・2・12 号線 第 3 次	O 00	1371.2	『報告 1』	0	0	9	0	0	7	4	0	0
13	府中市都市計画道路 2・2・12 号線 第 4 次	O 00 V 10	1420	『報告 1』	0	4	2	0	0	2	6	0	0
19	武藏野台駅前道路	V 08 V 09 V 18	310.2	『報告 10』	0	0	2	0	0	0	3	2	1
22	府中市都市計画道路 2・2・12 号線 第 5 次	V 10	2011.6	『報告 1』	1	5	4	0	0	9	20	0	2
35	府中市都市計画道路 2・2・12 号線 第 6 次	V 10	187.6	『報告 1』	0	0	0	0	0	0	0	0	0
58	武藏野台駅舎	V 08	135.1	『報告 10』	2	1	0	0	0	7	4	0	0
68	仮称小杉ビル	V 08 V 09	227.8	『概報 11』	0	0	3	0	0	0	0	6	0
78	加藤酒店	V 08 V 09	232.8	『概報 11』	0	0	0	0	0	1	8	0	0
177	都市計画道路 2・3・1 号線地区	097V03V04			0	1	6	0	0	7	111	4	9
386	ハイツ ハセガワ	O 86	61.4	『概報 28』	0	1	0	0	0	0	0	0	0
417	WE I L B I L L S H I R A I T O - D A I	V 10	177.7	『概報 27』	0	1	1	0	0	1	1	0	0
436	ハイツフジ	V 10	68.9	『概報 27』	0	1	2	0	0	0	1	0	0
513	クレスト白糸	O 86 O 96	174.8	『概報 29』	0	0	1	0	0	3	0	0	0
623	ペストライフ府中	O 84	311	『概報 32』	0	0	1	0	0	0	0	0	0
652	小杉マンション	O 85	220	『概報 32』	0	0	1	0	0	2	0	0	0
0659.T	立ち合い・カーサ中屋	O 97 O 98	270.7	『概報 32』	0	1	2	0	0	2	0	0	0
683	丸玉屋小勝ビル	V 07 V 08	1077.8	『概報 36』	0	2	7	0	0	10	16	9	5
698	ワンスパビリオン	O 98 V 08	169.9	『概報 36』	0	3	0	0	0	0	1	0	1
720	個人住宅	O 97	177.5	『概報 36』	0	0	0	0	0	2	0	0	0
745	グランデ武藏野台	V 09	361.9	『概報 37』	0	3	0	0	0	2	18	3	0
747	ハイタウン武藏野駐車場	V 09	134.3	『概報 37』	0	0	0	0	0	2	0	0	0
843	個人住宅	O 95	251.5	『概報 25』	0	2	0	0	0	1	2	0	0

第3表 近隣の調査地区一覧表（2）

通次数	現場名	グリッド	調査面積 (m ²)	掲載報告書	構造数								
					S A	S B	S D	S E	S F	S I	S K	S X	S Z
871	多摩川線管理所	O 87	22.2	『概報 25』	0	0	0	0	0	4	1	1	0
874	個人住宅	O 89	50	『概報 25』	0	1	0	0	0	0	0	0	0
880	個人住宅	O 95 O 96	253.8	『概報 25』	0	1	0	0	1	5	3	3	0
881	ハイツコンフォート	O 95	235.3	『概報 25』	0	0	1	0	0	0	5	1	0
925	(有)アキオ一	V 08	61.8	『概報 26』	0	1	0	0	0	0	0	0	0
941	藤和シティーホームズ府中白糸台	O 96	2135.3	『概報 21』	0	24	0	0	0	26	27	10	0
975	スチューデントパーク府中	O 87 O 97	661.1	『概報 21』	0	0	5	0	1	1	5	2	0
980	シダー武蔵野台	V 09	104.1	『概報 21』	0	2	0	0	0	0	2	0	0
1032	個人住宅	O 99	8.7	『概報 19』	0	0	0	0	0	0	0	2	0
1050	K・Mマンション	O 99 O 00 V 09 V 10	380	『概報 22』	1	0	2	0	0	2	4	4	0
1068	個人住宅	V 07	55.4	『概報 22』	0	0	0	0	0	0	0	8	3
1080	プレステージ小柳	O 84	192.9	『概報 22』	0	0	0	0	0	0	3	2	0
1097	グードフィールド白糸台	V 10 O 00	635.6	『概報 30』	0	0	1	0	1	4	11	3	0
1098	白糸台5丁目16-2他開発行為	V 20	43	『概報 22』	0	0	1	0	0	0	0	1	0
1111	個人住宅	O 75 O 85	32.9	『概報 30』	0	0	2	0	0	0	0	0	0
1125	シルクガーデン	O 95 O 96 V 05 V 06	620.8	『概報 30』	0	0	4	0	0	1	10	1	0
1132.T	ヒルズ府中白糸台ノアージュ	O 75 O 76	800	『武蔵国府関連遺跡 オーベル府中清水ヶ丘建設に伴う事前調査報告書 ヒルズ府中白糸台ノアージュ建設に伴う事前調査報告書』(盤古堂)	0	0	2	1	0	0	10	2	0
1134	個人住宅	O 85	51.8	『概報 30』	0	1	0	0	0	1	0	0	0
1145	白糸台開発工事	V 09 V 10	83.1	『概報 34』	0	0	1	0	0	3	3	0	0
1183	ビレッジイデ	O 89	246.8	『概報 38』	0	1	2	0	0	5	1	2	0
1185	個人住宅	V 07 V 17	137.5	『概報 38』	0	0	0	0	0	0	2	1	0
1190	シーダー武蔵野	V 08	255.4	『概報 38』	1	0	0	0	0	4	6	2	0
1194	オランダ壱番館・武番館	O 99	474.5	『概報 38』	0	0	1	0	0	4	0	1	0
1230	エクレール白糸台	O 98 O 99	299.3	『概報 40』	0	0	2	0	0	0	0	0	0
1233	個人住宅	O 88	29.7	『概報 39』	0	0	1	0	0	2	0	0	0
1271	府中白糸台4丁目計画	O 97	90.5	『概報 40』	0	0	0	0	0	3	0	2	0
1286	シーダー府中	V 08 V 09	264.2	『概報 40』	0	0	1	0	0	9	1	1	0
1329	クレール エスペランス	V 08 V 18	360.6	『概報 39』	0	0	1	0	0	0	6	11	1
1376	個人住宅	V 06	38.2	『概報 41』	0	0	1	0	0	1	0	1	0
1377	個人住宅	V 06	40	『概報 41』	0	0	1	0	0	0	0	0	0
1393	日光クリーニング店	O 85	72.9	『概報 41』	1	4	0	0	0	0	0	0	0
1430	マイユール エスト府中	O 84	93.7	『概報 42』	0	0	0	0	0	0	2	0	0
1489	武蔵野台駅舎	V 08	129.1	『概報 44』	0	0	1	0	0	1	3	5	0
1527	個人住宅	V 09	93.9	『概報 44』	0	0	0	0	0	0	2	0	0
1530	個人住宅	O 87	24.7	『概報 44』	0	0	0	0	0	1	0	0	0
1549	ホワイトファーム	V 05 V 06	132.3	『概報 45』	0	0	5	0	0	1	0	2	0
1550	J Aマイinz多磨支店	O 76	120.4	『概報 45』	0	0	5	0	0	0	0	1	14
1551	白糸台1丁目開発	O 95 V 05	455.8	『概報 45』	0	0	2	0	0	2	4	0	2
1556	山手ごひつじ保育園	V 08 V 09	246.3	『概報 45』	0	1	1	0	0	5	8	0	0
1557	個人住宅	O 85	77.7	『概報 45』	0	0	0	0	0	1	2	0	0
1575	白糸台1丁目分譲住宅6~8号棟他	V 05	120.5	『概報 45』	0	0	1	0	0	1	3	1	0
1590	白糸台1丁目77・78番地開発	O 95	10.3	『概報 45』	0	0	0	0	0	0	2	0	0
1597	個人住宅	V 07	34	『概報 46』	0	0	0	0	0	0	1	1	0
1637	個人住宅	O 95	55.9	『概報 47』	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1668	武蔵野台駅南口自転車駐車場	V 08	319.4	『概報 48』	0	0	2	0	0	3	3	3	0
1689	個人住宅	O 98	48.4	『概報 49』	0	1	1	0	0	2	9	2	0
1710	ヴァーチェ白糸台	O 98	1.6	『概報 49』	0	0	1	0	0	0	0	0	0
1772	グレイスワン	V 06	162.5	『概報 51』	1	2	0	0	0	0	1	1	1
1774	個人住宅	V 20	26.8	『概報 51』	0	0	1	0	0	0	1	0	0
1825	個人住宅	O 95	92.3		0	1	0	0	0	1	0	0	0
1878	個人住宅	O 85	9.1	府中市の遺跡1-令和2年度の調査1-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1964	白糸台四丁目宅地造成	V 07	421.4	当報告	0	3	1	0	0	5	19	8	1



第3図 近隣の調査地区 (1/5,000)

第4節 調査の経過

発掘調査は2023（令和5）年11月20日から2024（令和6）年2月19日まで行った。調査総面積は421.49m²（A区258.20m², B区44.35m², C区69.80m², D～L区49.14m²）である。

表土は重機により掘削し、遺構確認面（古代・縄文の二面）は人力で精査した。表土掘削及び遺構調査時の発生土は各調査区脇に仮置きし、調査終了後は埋戻しを行い原状に復した。以下に日付を追って記す。

2023（令和5）年

11月20日 準備工：プレハブ・発掘機材搬入。基準点移動。調査区設定（A・D～L区）。重機搬入。A区表土掘削開始。

11月22日 A区表土掘削完了。古代面検出全景写真撮影。遺構調査開始。

11月24日 D区・E区・I区・J区・K区・L区表土掘削完了。古代面検出全景写真撮影。遺構調査着手。

12月4～6日 C区調査区設定。表土掘削完了。古代面検出全景写真撮影。

2024（令和6）年

1月10日 B・H区を除き古代面調査終了遺構の空撮。終了後縄文面の調査開始。

1月12～26日 A区東半部・E区・F区・G区・K区・L区の縄文面調査終了。

この間19日にB区北側調査区設定。

1月26・29日 TP1区・TP2区で基準土層調査。TP1区検出礫の調査継続。

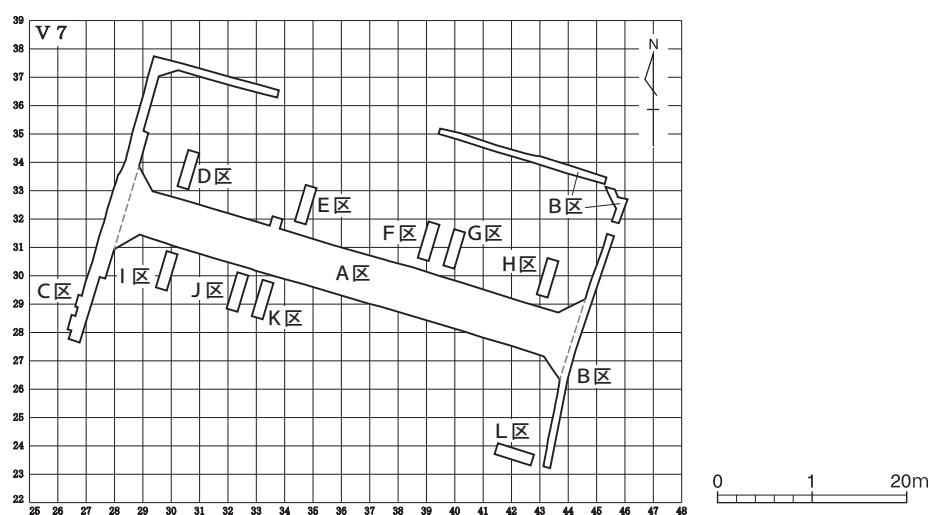
2月2日 B区東端部・H区の調査区設定。

2月9日 B区・H区の古代面調査終了遺構の空撮。終了後縄文面の調査開始。

2月13・14日 B区・H区の縄文面調査終了。TP1区検出礫の調査終了。

2月15～19日 重機による埋戻し。プレハブ・発電機・重機の搬出。現地調査終了。

以後、トキオ文化財株式会社聖蹟整理事務所にて整理作業にあたる。



第4図 調査区配置図 (1/800)

第5節 基本土層

本調査地区は、府中崖線から北へ約130m入った標高45.3～45.4mの立川段丘上に位置しており、ほぼ平坦である。本調査地区を含む白糸台地域では北西の第941次調査地区付近で標高46.3～46.4m、南東の第3・5・22次調査地区付近では標高44.0mを測り、南東方向に向かって緩やかに傾斜している。

調査に当たっては、調査地区を東西約52mの中央道路部分のA区、中央道路東西両端でT字型につながる後退道路部分東側（延長約48m）のB区、同西側（延長約45m）のC区、宅地浸透トレーンチ部分9か所のD～L地区に区分し、調査を実施した（第4図）。

基本土層の観察地点は中央道路部分A区で3箇所（①・②・③地点）とB・C区の四隅部分（④・⑥・⑦・⑧地点）、それに地表面下1.80mまで掘削を行ったA・B区の交点部分旧石器試掘坑部分（③・⑤地点=T P 1）とした（第5図）。

調査地区内の基本土層は府中市の基本土層に準拠したが、全体的に土層の残存状況が良好であったことから全ての土層が確認できた。特にIIa層・IIb層が①地点より東側に確認された。また、②地点付近から③地点に向かって地形が緩傾斜していることが分かる。

なお、旧石器試掘坑の③地点（T P 1）でV層（ソフトローム）とVI層（ハードローム）の境に拳大の礫3個が出土したため、礫群の可否確認のために⑤地点まで拡張調査した。礫は東西3.5m×南北1.2mの範囲に確認されたが、以下の理由から自然礫と判断した。

- ・全ての礫が焼けていないこと
- ・周囲に炭化物・焼土がないこと
- ・石器が出土しないこと
- ・礫と礫の間に多量のイモ石が存在すること（註1）
- ・VI層の色調がやや白くなり、水漬きローム層に当たること
- ・周辺の既往の調査でも同様の事例があり、自然礫と判断されていること

今後、当調査地区周辺での調査を実施する際にはVI層中の同様な礫について注意を要する。
遺構の確認は、古代をIII層上部、縄文時代をIV層上部で行った。

盛土

表土① 灰褐色土

表土② 黒褐色土 表土とIIa層土の混合土

IIa層 黒褐色土

IIb層 暗褐色土～黒褐色土 スコリア質で、ボソボソしている

III層 暗褐色土（武藏野II b層）

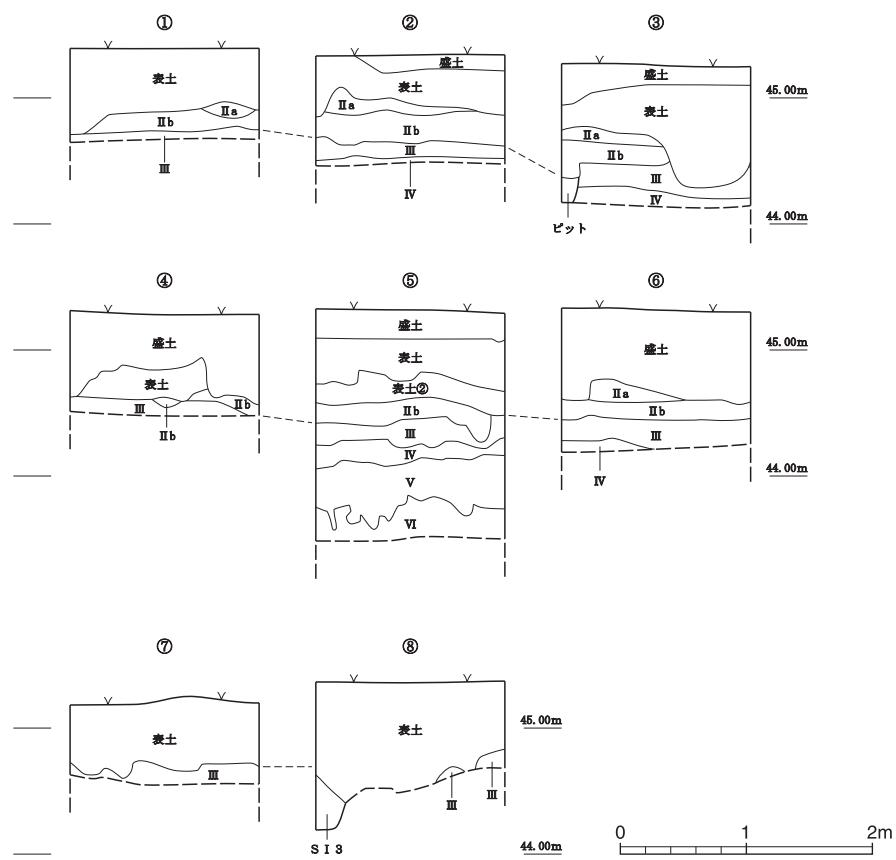
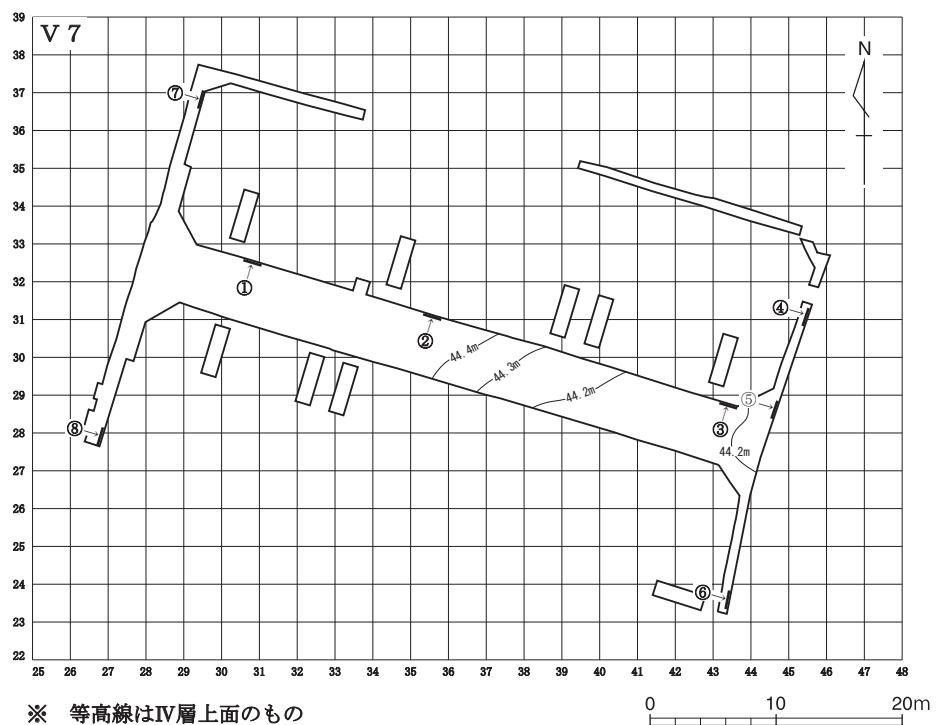
IV層 黄褐色土（漸移層）

V層 黄褐色土（武藏野III層、ソフトローム層）

VI層 黄褐色土～浅黄橙色土 ハードロームおよび水漬きハードローム

（註1） 旧石器試掘坑（T P 1、1.5m四方）のV層（ソフトローム）中から出土したイモ石の内容は次の通りであった。

- ・総点数 121点（砂岩系109点、チャート系12点）
- ・総重量 砂岩系（1630g、最大70g、最小3g）、チャート系（240g、最大90g、最小2g）
- ・大きさ 砂岩系1.4～6.5cm、チャート系1.5～5.5cm



第5図 基本土層観察位置図 (1/600), 柱状図 (1/60)

第2章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

今回の1964次調査では、縄文時代の土坑5基・集石遺構1基・小穴2基、古代（奈良・平安時代）の竪穴建物跡5棟・掘立柱建物跡3棟・墳墓1基・土坑15基・その他の遺構7基・小穴37基、中世の溝1条などが検出された（図面1・7、図版1～4）。

遺物は縄文土器・石器・土師器・土師質土器・須恵器・灰釉陶器・土製品・鉄製品・近世陶器など3,530点が出土している（第4表）。

検出された遺構の番号は以下の通りである。

竪穴建物跡	5棟	V 7 - S I 2 ~ 6
掘立柱建物跡	3棟	V 7 - S B 1 ~ 3
墳墓	1基	V 7 - S Z 4
土坑	20基	V 7 - S K 15 ~ 34
溝	1条	V 7 - S D 3
その他の遺構	8基	V 7 - S X 13 ~ 20 (集石遺構1基含む)
小穴	39基	V 7 - P 5 - 001 ~ 039

第4表 出土遺物集計表

遺構名	縄文		礫	緑泥片岩	古代					近世以降	時期不明	総計	
	土器	石器			土師器	土師質土器	須恵器	灰釉陶器	土製品	鉄製品			
S I 2 A	6		5		266		213	6	2	3			502
S I 2 B					20		9			1			30
S I 2 C			1		3		6						10
S I 3	1				82		11						94
S I 4	2		3		134		46						185
S I 5					45		35						80
S I 6	1	1	2		66	8	76	1					155
S B 1	8		1		57		15						81
S B 2	1				13		16						30
S B 3	1				10		3	2					16
S Z 4			119		5		3						127
S D 3			2		8		1						11
S K	1				25		37						63
S X 19	138	16	1,296				0				1	1,451	
S X			9		7		27						43
小穴(P)	8		3		12	1	15						39
Ⅲ層	101	13	69										183
表土・搅乱	138	3	1	3	116	1	121	4					387
試掘	13	1			13	2	10	1			3		43
総計	419	34	1,511	3	882	12	644	14	2	4	3	1	3,530

第2節 繩文時代

繩文時代の遺構は、土坑5基（V7-SK19～22・30）・その他の遺構1基（V7-SX19）・小穴2基を検出した。遺物を出土したのは集石遺構のV7-SX19のみであり、そのほかの遺構は覆土から当該期の所産と判断した。遺物は、V7-SX19及び第III層に伴うものが大部分を占める。

1. 土坑

V7-SK19（別表5, 図面4, 図版5）

遺構 K区のV7（33, 29）区に位置する。西側は調査区域外にあり、南端をV7-P5-030に切られ、遺存状態はやや不良である。

本遺構の平面形は楕円形と思われ、規模は長軸0.92以上×短軸0.26以上m、確認面からの深さは0.50mである。

覆土は褐色土と黄褐色土の2層からなる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 遺物の出土がなく時期の判断は難しいが、覆土から当該期の所産と判断した。

V7-SK20（別表5, 図面4, 図版5）

遺構 A区中央付近のV7（35, 29）区に位置する。大部分をV7-SI4およびV7-SB3P1-1に切られ、遺存状態は不良である。

このため本遺構の平面形は不明で、規模は南北0.72以上×東西0.46以上m、確認面からの深さは0.08mである。

覆土は単層で、暗褐色土を主体とする。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 遺物の出土がなく時期の判断は難しいが、覆土から当該期の所産と判断した。

V7-SK21（別表5, 図面4, 図版5）

遺構 A区東側のV7（40, 28）区に位置する。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は不整楕円形で、規模は長軸0.77×短軸0.60m、確認面からの深さは0.22mである。

覆土は暗褐色土と黄褐色土の2層からなる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 遺物の出土がなく時期の判断は難しいが、覆土から当該期の所産と判断した。

V7-SK22（別表5, 図面4, 図版5）

遺構 L区のV7（42, 23）区に位置し、北側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は楕円形で、規模は長軸0.72以上×短軸0.88m、確認面からの深さは0.60mである。

覆土は褐色土と暗褐色土を主体とする3層からなる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 遺物の出土がなく時期の判断は難しいが、覆土から当該期の所産と判断した。

V 7 - SK 30 (別表5, 図面4, 図版5)

遺構 L区のV 7 (42, 23) 区に位置し、南・東側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸方形で、規模は南北 1.06 以上 × 東西 1.38 以上m, 確認面からの深さは 0.30 m である。

覆土は褐色土と黄褐色土の2層からなる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 遺物の出土がなく時期の判断は難しいが、覆土から当該期の所産と判断した。

2. その他の遺構

V 7 - SX 19 (集石遺構) (別表6, 図面5・6, 図版5・6)

遺構 A区東寄りのV 7 (37 ~ 40, 28・29) 区に位置し、南半部分は調査区域外にある。検出された西半部分で V 7 - P 5 - 009・014・031・037 に切られるが、遺存状態は良好である。多量の礫と土器の出土状況を手掛かりに、集石遺構の範囲(掘り込み位置)・深さ(床面)等の精査に努めたが、遺構の覆土と地山層の区別が困難なこともあります、何れも想定の範囲にとどまらざるを得なかった。

平面形は楕円形で、長軸 7.80 × 短軸 3.14 以上m, 確認面からの深さは 25 ~ 30 cm ほどと考えられる。確認面から深さ 30 cm ほど程度までは多量の礫と土器片が認められるが、底面は、硬化等の痕跡は認められず明瞭ではない。中央部に検出された土坑状落ち込み(P 2) は2段掘りされていて、土層断面図から復元される規模は外側の楕円形のもので東西(長軸) 1.43 × 南北(短軸) 0.72 以上m, 内側の類円形のもので東西 0.85 × 南北 0.52 以上m ほどである。深さは 40 cm ほどである。

覆土は暗褐色土、褐色土、黒褐色土などの5層に区分したが、第3層は掘り過ぎの可能性が高く実質4層となる。集石遺構の全体には多量の礫と土器を含む第1・2層、中央の土坑状遺構(P 2)には多量の礫と炭化物粒を微量含む第4・5層と掘方の第6層がある。

遺物 (別表7・8, 図面27, 図版23)

出土した礫の総数は 1,296 点で(第5・6表), その内訳は、ほぼ遺構全体に認められる第1・2層中から 994 点(76.7%)が、中央の土坑状遺構(P 2)からは直上第1層中の 101 点と、第4・5層中の 201 点(15.5%)の計 302 点(29.3%)が出土している。P 2 の出土状況は特に密度が濃くなるような変化は見られず、ほぼ第1・2層中の出土状況と同様である。

礫の破損状況は 50% 以下が 929 点(71.7%)で、25% 以下も 238 点(18.4%) 見られる。重量も 100 g 以下の礫が 1,122 点(86.6%) で大部分を占め、50 g 以下も 499 点と最も多い。また、礫の被熱程度がなしと軽度のものが 836 点(64.5%) あって、煤・タール等の付着物ありのものが 1,041 点(80.3%) を占めている。これらを総合的に判断すると礫の再利用が行われたものと推察される。なお、接合した礫は 19 例の 45 点あり、距離が 3.0 m を超える

第5表 V7-SX19出土礫集計表

石材別集計

石材	遺構名	S X 19		S X 19 P 2		総計	
		個数	重量 (g)	個数	重量 (g)	個数	重量 (g)
		比率 (%)	比率 (%)	比率 (%)	比率 (%)	比率 (%)	比率 (%)
砂岩		751	48,681.7	223	9,310.5	974	57,992.2
		75.6	76.5	73.8	73.8	75.2	76.1
チャート		81	5211.7	38	1439.9	119	6,651.6
		8.1	8.2	12.6	11.4	9.2	8.7
ホルンフェルス		72	3,572.0	17	870.7	89	4,442.7
		7.2	5.6	5.6	6.9	6.9	5.8
礫岩		24	2,161.1	7	379.8	31	2,540.9
		2.4	3.4	2.3	3.0	2.4	3.3
安山岩		24	1,516.4	5	160.3	29	1,676.7
		2.4	2.4	1.7	1.3	2.2	2.2
凝灰岩		22	973.8	9	361.2	31	1,335.0
		2.2	1.5	3.0	2.9	2.4	1.8
泥岩		13	951.2	3	88.9	16	1,040.1
		1.3	1.5	1.0	0.7	1.2	1.4
閃綠岩		3	276.4	—	—	3	276.4
		0.3	0.4	—	—	0.2	0.4
頁岩		3	209.1	—	—	3	209.1
		0.3	0.3	—	—	0.2	0.3
玄武岩		1	74.6	—	—	1	74.6
		0.1	0.1	—	—	0.1	0.1
総計		994	63,628.0	302	12,611.3	1,296	76,239.3

重量別集計

重量	遺構名	S X 19		S X 19 P 2		総計	
		個数	比率 (%)	個数	比率 (%)	個数	比率 (%)
50 g 以下		499	50.2	208	68.9	707	54.6
50.1 ~ 100 g		344	34.6	71	23.5	415	32.0
100.1 ~ 200 g		122	12.3	23	7.6	145	11.2
200.1 ~ 300 g		24	2.4	—	—	24	1.9
300.1 ~ 500 g		3	0.3	—	—	3	0.2
500.1 g 以上		2	0.2	—	—	2	0.2
総計		994		302		1,296	

破損度集計

破損度	遺構名	S X 19		S X 19 P 2		総計	
		個数	比率 (%)	個数	比率 (%)	個数	比率 (%)
完形		36	3.6	7	2.3	43	3.3
90 ~ 99%		10	1.0	—	—	10	0.8
89 ~ 75%		47	4.7	8	2.7	55	4.2
74 ~ 50%		200	20.1	59	19.5	259	20.0
49 ~ 25%		527	53.0	164	54.3	691	53.3
25%以下		174	17.5	64	21.2	238	18.4
総計		994		302		1,296	

被熱度集計

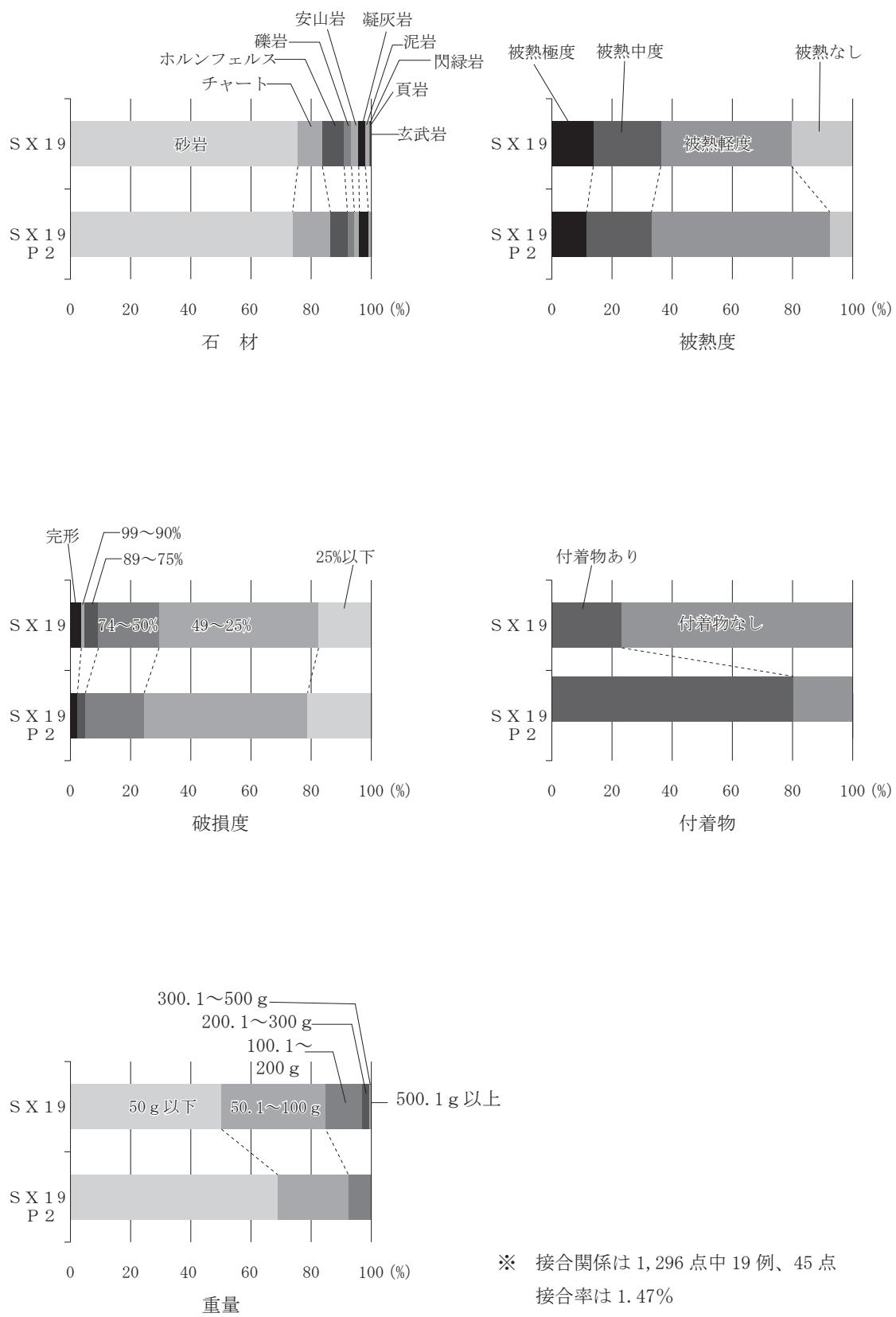
被熱度	遺構名	S X 19		S X 19 P 2		総計	
		個数	比率 (%)	個数	比率 (%)	個数	比率 (%)
極度		137	13.78	35	11.59	172	13.27
中度		223	22.43	65	21.52	288	22.22
軽度		432	43.46	179	59.27	611	47.15
なし		202	20.32	23	7.62	225	17.36
総計		994		302		1,296	

付着物集計

付着物	遺構名	S X 19		S X 19 P 2		総計	
		個数	比率 (%)	個数	比率 (%)	個数	比率 (%)
あり		763	76.76	278	92.05	1041	80.32
なし		231	23.24	24	7.95	255	19.68
総計		994		302		1,296	

※但し、各比率結果は小数点以下第2位で四捨五入しているため、その合計は100%になるとは限らない。

第6表 V 7-S X 19 碓構成グラフ



ものが3例（最長3.6m）ある。

石材は砂岩が974点（75.2%）で最も多く、以下チャート・ホルンフェルス・礫岩・安山岩・凝灰岩・泥岩・閃緑岩・頁岩・玄武岩の順となる。近在で入手できる石材が主体であり、府中崖線付近の立川礫層から採取した可能性が考えられる。

土器は総数138点が出土した（第7表）。小片や細片が多く、破片接合しても完形に近くなるものはない。

出土土器のほとんどが中期の土器で、初頭の五領ヶ台式後半期のものが1点、そのほかは後葉の加曽利E2式から3式にわたり、加曽利E3式期の土器が103点と出土土器の主体（75%）をなす。さらに加曽利E3式では後半期にあたる新地平編年（小林他2016）の12b期が74点（53%）、次いで12c期が29点（21%）となり、新地平編年の12b期後半のものが出土土器の大半を占めている。

遺構は全容を明らかにできてはいないが、出土した土器の時期に大きなばらつきがなく、上記のように時期的な纏まりをもつことから、加曽利E3式後半の新地平編年12b期後半の所産と考えられる。また、集石の礫の破損状況などの観察によって、細礫化していくことにより再利用が推測されることから、新地平編年の12c期にまでわたる可能性も考えられよう。

出土土器のうち10点を図示した。

J001は五領ヶ台式後半期、新地平編年3a期の深鉢形土器胴部破片で、半截竹管横位平行沈線内に交互刺突文、半截竹管内側による押し引き文が施される。J002は口縁部がやや内湾する深鉢形土器の口縁部破片で、太く浅い沈線と低い隆起線により渦巻文状区画文を施す。区画内は縄文RLが施文される。J003は胴部がやや膨らむ深鉢形土器の胴部破片で、縄文RL地文に間隔の広い縦位平行沈線間を磨り消した磨消懸垂文を施す。J004は深鉢形土器の胴くびれ部破片で、縦位平行沈線間を無文部分と縄文RLを充填した部分とを交互に配置する。上端の破損部を口縁状に研磨しており、二次利用が窺える。これらJ002～J004の時期は加曽利E3式後半、新地平編年12b期である。J005は口縁部が内湾し、胴部へ緩やかにすぼまる深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、右端側に突起が付くが折損する。口縁部には連続円形刺突文が弧状に配され弧状の区画を形成し、内部は無文となっている。弧状区画下から胴部へ3本の縦位平行沈線による磨消懸垂文が垂下する。磨消懸垂文間には円形刺突を起点とした蕨手状蛇行沈線が施される。右端の欠損突起下には円形刺突起点の斜行する沈線とその内側に平行してやや湾曲する沈線が見られ、いずれも磨消懸垂文の縦位沈線に接続するものと見られる。地文は縄文RLで、施文は沈線と同様に全体に浅い。J006は口縁部が僅かに内湾する深鉢形土器の口縁部破片で、沈線による波状文と蕨手状文が見られる。地文は縄文RLで、横位と縦位に交互に施文されている。J007は鉢もしくは浅鉢形土器の口縁部破片で、口縁部は太く浅い沈線を境に無紋帶となり、以下胴部は櫛歯状工具による縦位条線が施される。外面の沈線から無紋帶及び内面にかけて赤彩痕跡が観察される。J008は鉢形土器の頸部から胴部の破片で、無文の口縁部は外傾して開き頸部で強く括れる器形となる。張り出した胴部には無文地に太い沈線で渦巻や円形の文様が施される。内外面ともに器面が磨かれる。J009はJ008と同じ器

形の鉢形土器の頸部から胴部の破片で、J008より小型である。太い沈線でやや深く蕨手状文や円形もしくは楕円形文が施され、内部に縄文RLが見られる。器面は内外面ともに磨かれる。J005～J009の時期は加曽利E3式後半、新地平編年12c期である。J010は鉢もしくは深鉢形土器の胴部破片で、やや外傾する口縁部と胴部の境に半円状に突出する扁平な突起が付く。突起部分以外は隆起帶として廻るものと思われる。突起の上下にはごく浅い沈線が廻り、下部沈線から下は胴部下方に向けて櫛歯状工具による条線が施される。時期は加曽利E4式、新地平編年13b期であろう。

石器は16点出土した。器種別の内訳は、打製石斧11点、石皿1点、剥片4点である。破損しているものが多く、状態の良い打製石斧3点を図示した。

Q001は砂岩製で撥型。Q002は凝灰岩製で刃部は欠損する。Q003は頁岩製で形態は分銅形に近い。

時期 縄文時代中期、加曽利E3式後半の新地平編年12b期後半の所産と考えられる。

3. 小穴

A区東端のV7(43, 28)区でV7-P5-035, G区V7(39・40, 36)区でV7-P5-038の2基を検出した。何れも類円形で径40cm、深さ40～68cmほどである。

V7-P5-038からは加曽利E3式2点（新地平編年12a期1点、12c期1点）が出土しているが、図示できるものは無い。

4. 遺構外出土遺物（別表7・8、図面6・28～30、図版23・24）

遺構外出土土器としては、第III層の縄文時代遺物包含層から101点、縄文時代より後出の遺構から30点、表土・撓乱などから138点出土した。また、試掘調査の際に13点が出土している（第7表）。

第III層の縄文時代遺物包含層出土土器は13点を図示した。J011は中期初頭五領ヶ台式後半期、新地平編年3b期の深鉢形土器胴部破片で、半截竹管による縦位集合沈線が施される。器面は磨かれている。J012は深鉢形土器の底部破片で、底に網代痕が見られる。胎土の様相から見ても五領ヶ台式であろう。J013は深鉢形土器胴部破片で、縄文RL地に3本の縦位平行沈線による磨消懸垂文が施文される。J014は深鉢形土器口縁部下部から胴部にかけての破片で、横位の太い沈線を境に上部は低い隆起線と太い沈線による区画文、胴部側は幅広い2本の平行沈線による磨消懸垂文が施され、中に太い沈線による蕨手状文が見られる。地紋は縄文RLである。J015は深鉢形土器胴部破片で、縄文RL地に太く深い沈線による磨消懸垂文が施される。J016は深鉢形土器胴部に隆起線と沈線による大きな渦巻文が施文される土器の胴部破片で、縄文RL地に隆起線とやや太く深い沈線による小渦巻文と区画文が見られ、さらに左下方へ展開する。左側は隆起線が剥離している。J013・014・015・016の時期は加曽利E3式後半、新地平編年12b期である。J017は深鉢形土器の口縁部破片で、無文の口縁部下に太く深い沈線が廻る。以下は縄文RRLが施される。J018は深鉢形土器の口縁部破片で、波状口縁。口唇直下に太く深い沈線が廻る。縄文RLの地文に浅い2本の平行沈線間を磨り消した波状文を施文する。器面は磨かれる。

J019 は鉢形土器の口縁下部から胴部にかけての破片で、無文口縁部下に太く浅い沈線が廻る。以下は櫛歯状工具による条線が施文される。J020 は深鉢形土器の口縁部破片で、器面は粗くなだられた無文地に口縁下に浅い沈線が廻る。沈線下には半截竹管による不整な円形刺突が横位に等間隔に施され、刺突間は半截竹管の背側を引きずったような粗い沈線で連結される。刺突文の下からは太く浅い沈線が懸垂文状に垂下する。J021 は鉢か壺形土器の頸部から胴部破片で、頸部の括れから口縁へは強く外反する。胴部は外側に張り出し、隆起線と太い沈線により渦巻文や円形、橢円形の区画文が施文される。区画内には縄文が施されている。J017～J021 の時期は加曽利 E 3 式後半、新地平編年 12c 期である。J022 は深鉢形土器の口縁部破片で、細い棒状工具による沈線文様と文様内に同工具による刺突が施される。器面が荒れているため判然としないが、縄文が施されている部分が見られる。加曽利 E 式末から後期初頭に属するものであろうか。J023 は深鉢形土器の胴部破片で、無文地にやや細い沈線による 3 本の縦位沈線と大きく蛇行して垂下する沈線が施文される。時期は後期堀之内 1 式に属するものであろう。

縄文時代より後出の遺構出土土器と表土出土土器は合わせて 13 点を図示した。これらの土器は、早期から晩期までの大きな時期幅が見られる。J024 は尖底深鉢形土器の胴部破片で、やや間隔のあいた撚糸文 R が浅く施文されている。早期撚糸文系土器の稻荷台式土器であろう。J025 は深鉢形土器の胴部破片で、縄文 RL 地文に扁平な浮線文を貼り付け、その上にヘラ状工具で細い刻みを施す。刻みは上段から下段へ右下がりと左下がりに交互に施される。時期は浮線文のありかたから見て前期諸磯 b 式土器の中 2 段階後葉期であろう。J026 は深鉢形土器の胴部破片で、地文は縄文 RL。半截竹管による横位平行沈線下に同工具での鋸歯状文が施されている。右側には鋸歯状文を切って 5 本の縦位平行沈線が施される。時期は中期五領ヶ台式後半期、新地平編年の 4 期に属するであろう。J027 は深鉢形土器の胴部破片で、中期加曽利 E 2 式、新地平編年 11c 期の連弧文土器である。縦位条線を地文とする。2 本の横位沈線が廻りその上方に弧線の一部が見られる。J028 は深鉢形土器の口縁部破片で、隆起線と太い沈線により渦巻文と円形や橢円形の区画文が施される。一部隆起線上や区画内に縄文 RL を施す。時期は加曽利 E 3 式後半、新地平編年 12b 期である。J029 は深鉢形土器の口縁部破片で、内湾する。地文に縄文 RL が施される。平行する沈線間を磨消した波状文の一部が見られる。J030 は深鉢形土器の口縁部破片で、やや内湾し、波状口縁となる。口縁部には外端部に縄文 L が施され、その下には 2 段に半截竹管端部を回転させた円形刺突文列が施文される。胴部には疎らな縦位の条線が見られる。J031 は深鉢形土器の胴部破片で、無文地に浅い沈線による二重弧線文、懸垂文、蕨手状文などが施文される。二重弧線文の内側には縄文 RL が施される。器面は磨かれている。J029～J031 の時期は加曽利 E 3 式後半、新地平編年 12c 期である。J032 は深鉢形土器の胴部破片で、やや太く浅い沈線により対向 U 字文が施文される。U 字文内には縄文 LR が施され、無文部の器面は磨かれている。時期は加曽利 E4 式、新地平編年 13a 期である。J033 は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部にヘラ状工具による細い沈線が 2 本平行して廻り、右側には同様の平行沈線が斜行する。後期堀之内 1 式であろう。J034 は深鉢形土器の胴部破片で、平行する 2 本の沈線間に列点が施される。J035 は深鉢形土器の胴部破片で、縄文 LR が緻密に横位施文されている。J036 は深鉢形土器の胴部破片で、

器面はヘラナデされているが粘土帯を明瞭に残す無文の粗製土器である。J034～J036の時期は晩期安行式期であろう。

以上、今回の調査では縄文早期から晩期に至る時期幅のある土器が出土した。白糸台遺跡の既往調査内容に対比すると、竪穴住居跡などの明確な居住痕跡は確認されなかつたものの、集石遺構1基や土坑4基が発見された。特にV7-SX19の集石遺構は縄文中期後半加曾利E3式期のものと考えられ、縄文中期後半を中心とする集落遺跡とされる本遺跡の一角にあるものとして位置付けられよう。また、中期初頭の五領ヶ台式土器、後半の加曾利E式土器、中期末～後期初頭、後期前葉の堀之内式土器、晩期安行式土器などは既往調査で出土しており、それらの成果とも整合している。

市内における晩期安行式土器の出土地は少なく、僅かに大国魂神社裏遺跡とその近辺から土器が出土しているが住居跡などは確認されていない。今回の調査でも縄文時代より後

第7表 縄文土器集計表

時期	形式	新地平 編年	SX19	Ⅲ層	SB1	SB2	SB3	SI2	SI3	SI4	SI6	SK28	P5- 009	P5- 031	P5- 037	P5- 038	P5- 039	P5- 093	P5- 100	試掘	表土	搅乱	総計	
早期	燃糸文系 稻荷台式									1											1		2	
前期	諸磯b式																				1		1	
中期	五領ヶ台	3a	1																				1	
	3b			1						1													2	
	3期か																				1	5	6	
	五領ヶ台 無文	3期か																				1	1	
	五領ヶ台	4期																			1		1	
	五領ヶ台か				1																		1	
	加曾利E2	11c																1					1	
	加曾利E2～3	11～ 12	9	3																	8		20	
	加曾利E3	12a			1													1			2		4	
	12b	75	54	3													1	1			4	65	1	204
	12 b			1																			1	
	12c	29	13	1			1												1	1		2	9	57
	加曾利E3 磨消懸垂文				8																			8
	加曾利E3～4	12c～ 13b			2																			2
	加曾利E4	13a				1																3		4
	加曾利E4か	13bか	1		2																			3
	加曾利E				1																			1
	加曾利E 浅鉢				1																			1
	加曾利E 繩文		5	9	1	1											1					12		29
	加曾利E 無文		16	1				3				1	1									18		40
	加曾利Eか																					1		1
	加曾利E 末～ 後期初頭				1																			1
	曾利IVb	12b																				1		1
	曾利IVか	12a～b	1																					1
	中期末葉～ 後期初頭																				1		1	
後期	後期初頭か			1																				1
	堀之内1式か				4				3												1	3		11
晩期	晩期安行式か																				1	2		3
	晩期 粗製土器 無文																				3	4		7
	不明																1					1		2
総計			138	101	8	1	1	6	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13	136	2	419

出の遺構や表土から土器が出土しているが遺構は確認されなかつた。晚期の主たる居住空間は台地上より府中崖線下の沖積低地にある可能性が高いと考えて良さそうである（中山真治氏ご教示）。また、早期撚糸文系土器（稻荷台式）や前期諸磯b式土器の出土は白糸台遺跡では今回が初となろう。

石器は縄文時代の遺物包含層（第III層）から13点、古代の竪穴建物V7-SI6の覆土から1点、表土から3点、試掘調査で1点の計18点が出土した。器種別の内訳は、打製石斧12点、スクレイパー1点、石皿1点、礫器？1点、剝片3点である。第III層からは状態の良い打製石斧4点、V7-SI6出土のスクレイパー1点、試掘調査で出土した打製石斧1点を図示した。

Q004～Q007は第III層より出土した打製石斧である。Q004・Q005は砂岩製で短冊形である。Q006・Q007はホルンフェルス製で、Q006は撥形、Q007は短冊形をなす。

Q008はホルンフェルス製で、風化が著しい。Q009は頁岩製のスクレイパーである。

第3節 古代・中世

1. 竪穴建物跡

V7-SI2A・B・C（別表1、図面10～12、図版7～10）

本遺構は、北東部分が調査区域外に位置するが、調査開始当初は1棟の建物跡と考えていた。調査の進行過程で建物跡中央付近から遺棄された竈が検出されたことや、貼り床の床面が上下に3面確認されたことなどから、2回の拡張が行われたことが判明した。このため、構築当初の建物跡をC期として以降B期・A期の3期に区分したが、古い順に記述することにする。

遺構

C期

A区西端のV7（28・29、32・33）区に位置する。建物跡の大部分が一回目の拡張を行ったB期部分に含まれるため竈および床面の下部が遺存していたが、遺存状況は余り良くない。この段階では重複するV7-SB2の柱穴P2-3との切り合いは無かつたようである。

平面形は不整方形で、東壁中央に竈を設けている。規模は南北2.70以上×東西2.85以上m、確認面からの深さは60cmほどで、主軸はB期と同じと考えられる。

床面は、中央部が素掘り、周辺部が貼り床で、竈前面から南壁にかけて硬化面が認められた。周溝およびピットは認められなかった。

竈は遺存状態が悪く、わずかにB期竈底面化下に楕円形の掘方が遺存していたのみであった。B期と同様に白色砂質粘土で構築したものと考えられる。

掘方は、周辺部分を浅く10cmほど掘り込んでいる。

B期

B期は、C期の北辺および西辺を中心に20cmほど拡張しているが、南辺もわずかではあるが拡張している可能性が高い。この段階でV7-SB2の柱穴P2-3を切っている。建物跡の大部分が二回目の拡張を行ったA期部分に含まれるため、遺存状況は余り良くない。

平面形はC期と同じ不整方形で、東壁中央に竈を設けている。規模は南北3.15×東西3.20m、確認面からの深さは55cmほどで、主軸方位はN-98°-Eである。

床面は、拡張に伴ってC期床面から全体に最大8cm埋め込んで全面貼り床としており、竈前面の中央部に硬化面が認められた。また、拡張した北壁および西壁下部分は地山のソフトローム土であった。周溝およびピットは認められなかった。

竈は、北半部分が調査区域外に位置していることやA期床面が上部に築造されていることもあり遺存状態が悪く、わずかに右袖部分に遺存する白色砂質粘土から当粘土で構築したものと考えられる。また、右袖の白色砂質粘土は壁際で切断され、先端部が失われていることが床硬化面の遺存状況から窺われるが、A期拡張の際の竈の移転に伴って白色砂質粘土を削り取り再利用したものと推察される。

A期

A期は、新たにB期建物跡の東辺を75cmほど拡張している。この段階で新たにV7-SB2の柱穴P4-2を切っている。遺存状況は良好である。

平面形は不整長方形に変化し、東壁中央に竈を設けていると推察される。規模は南北3.17×東西4.50m、確認面からの深さは38～50cmほどで、主軸方位はN-96°-Eである。

覆土は、褐色土・黒褐色土を主体とする4層からなる。

床面は、拡張に伴ってB期建物跡部分は竈も含めて床面から全体に最大10cm埋め込んで全面貼り床としているが、東側拡張部分は一段高くなるため、全体に西側に緩やかに傾斜している。東壁寄りの床面中央部硬化面が認められた。ピットは、建物跡3隅の床面上に3基（P1～3）検出された。P1～3は、径60cmの類円形、深さ14～20cmの何れも主柱穴と考えられる。

遺物（別表9～11、図面31・32、図版25・26）

遺物は構築当初のC期、1回目の拡張がなされたB期、2回目の拡張がなされたA期の計3時期の建物跡から出土している。古代の土師器289点、須恵器228点、灰釉陶器6点、鉄製品4点、土製品2点、礫6点、縄文時代土器7点など計542点があり、覆土出土のものが多いA期が9割以上を占める。各期の竈・床直上・覆土出土のものを中心に、A期15点、B期4点、C期4点の計23点を図示した。ここでも構築当初のC期から新しい順に記述することにする。

C期の1001・1002は須恵器の壺で、底部の調整技法は何れも回転糸切り後未調整であるが、前者より後者の内底径が7.2cmと大きいことから古く、前者が南比企窯跡群編年（渡辺1990a・b、加藤他1914・1915）のHⅦ期、後者が同編年のHⅥ期に相当するであろう。1003は天井部に回転ヘラ削りをとどめる壺の蓋であり、同編年のHⅥ期と思われる。M001は鉄製の曲刃鎌で、装着部折り返し部分に当たる。

B期の1004～1007は土師器の甕で、1004は「コの字」状口縁の、1005・1006は「コの字」状口縁が少し崩れた武藏型甕、1007も武藏型甕の底部である。落川・一の宮遺跡編年（福田健司2002・2017）の第25～26段階に相当する。

A期の1008は土師器の壺で、体部外面に指頭圧痕をとどめる南武藏型の壺である。鶴間編年（鶴間2009）の5段階（9世紀後葉～10世紀初頭）に相当する。1009～1013は須恵器の

坏で、底部の調整技法は 1009～1012 が回転糸切り後未調整、1013 が回転糸切り後周辺回転ヘラ削りである。これらはさらに内底径の大きさから、前者の 1009・1010 は南比企窓跡群編年のHIX期と 1011・1012 は同編年のHVIII期に、さらに後者の 1013 は同編年のHIV期に相当する。1014 の須恵器塊は底部の調整技法が回転糸切り後未調整で同編年のHIX期に相当する。1015・1016 は須恵器の皿で、前者は底部の調整技法が回転糸切り後未調整のもの、後者は高台付のものである。同編年のHVIII期～HIX期の頃に相当するとと思われる。1017 は須恵器の蓋で、弓張の天井部と鶴首状の口縁部が特徴である。同編年のHIV期に相当する。1018 は灰釉陶器の短頸壺底部と思われる。M002～M004 は鉄製品で、M002・M003 は刀子、M004 は曲鎌の先端に近い部分である。Y001 は土製品の土錐である。

時期 C期は竈や掘方出土の南比企窓跡群編年HVI・VII期に相当する須恵器坏から、武藏国府土器編年（山口 1984, 府中市 2021）のH3期（9世紀中葉）に、B期は竈や床直上出土の落川・一の宮遺跡編年の第25～26段階に相当する土師器甕から、武藏国府土器編年のH4期（9世紀後葉）に、A期は床直上出土の南比企窓跡群編年HVIII・IX期に相当する須恵器坏から、武藏国府土器編年のH5期（9世紀末）にそれぞれ相当すると考えられる。これらから当建物跡はH3期（9世紀中葉）～H5期（9世紀末）まで約半世紀にわたり、同位置で存続したことが知られる。

V7-SI3 (別表1, 図面12・13, 図版10)

遺構 C区南端のV7 (26・27, 28・29) 区に位置する。建物跡の中央部付近を検出したが、それ以外の大部分は調査区域外に位置する。南・北両壁の上部を搅乱に切られているが、遺存状況は良好である。

平面形は不明で、規模は南北3.70以上×東西1.67以上m, 確認面からの深さは52cmほどで、主軸方位はN-99°-Eである。

覆土は、ロームブロックを多く含む黒褐色土を主体とする5層からなる。第1・2層はロームブロックを多く含む上に全体に締りがあり、住居の壁際が少し埋まった段階で一気に埋め戻したものと考えられる。

床面は、中央部が素掘り、周辺部が貼り床で、検出された建物跡中央付近に硬化面が認められた。周溝は南・北壁下に認められ、北壁には壁下のものとP2につながる2条があり、前者が古い。何れも幅約20cm, 深さ10cmである。ピットは、南壁寄りの土坑状のP1を含め2基が検出された。P1は楕円形の平面で、規模は長軸1.15m×短軸0.9m, 床面からの深さ0.54mである。上層が貼り床で、覆土は土師器甕小片・焼土粒・白色粘土粒を含む黒褐色土を主体としており、床下土坑と考えられる。

竈は調査区域外にあり詳細は不明である。

掘方は、周辺部分を浅く13cmほど掘り込んでいる。

遺物 (別表9, 図面33, 図版26)

大部分はP1(床下土坑)の覆土から出土しており、古代の土師器82点、須恵器11点など計93点がある。大部分は土師器の武藏型甕の小破片で図示できるものがなく、北壁下の覆土下層とP2出土のもの2点を図示した。1019は須恵器の坏で、内湾気味の体部と外反して

肥厚する口縁部の特徴から南比企窓跡群編年のHⅧ期以降に相当すると思われる。1020は須恵器の甕の胴上半部で、外面に平行叩き痕と内面に径3.7cmの円形の当て具痕をとどめる。

時期 多く出土している武藏型甕の小破片や須恵器坏の年代観などから、武藏国府土器編年のH4～6期（9世紀後葉～10世紀中葉）頃と考えられる。

V7-SI4 (別表1, 図面13～15, 図版11・12)

遺構 C区南端のV7(35・36, 29)区に位置する。建物跡の竈を含む北壁部分を70cm幅で検出したが、それ以外の大部分は調査区域外に位置する。建物跡の北西・北東隅部分をV7-SB3の柱穴P1-1およびP2-1とV7-P5-034に切られているが、遺存状況は良好である。

平面形は不明で、規模は南北0.72以上×東西3.96m、確認面からの深さは51cmほどで、主軸方位はN-15°-Eである。

覆土は、黒褐色土・黒色土を主体とする4層からなる。

床面は、中央部が素掘り、周辺部が貼り床で、検出された建物跡中央付近に硬化面が認められた。周溝は東西壁下に認められ、前者が幅25cm、深さ13cm、後者が幅35cm、深さ8cmである。

竈は北壁中央東寄りに位置する。規模は南北軸長106cm、両側壁幅60cmで、北壁外にU字状に75cm掘り込み、白色砂質粘土で構築していた。竈内右側壁寄りに自然石（砂岩）の支脚が立った状態で検出されたが、据え付けの穴は径26cm、深さ5cmを測る。左側壁側にも並列して径20cm、深さ5cmの穴があり、掛け口が横二つ掛けであったと考えられる。

掘方は、周辺部分を浅く13～20cmほど掘り込んでいる。

遺物 (別表8・9, 図面33・34, 図版27)

大部分は竈・竈前面の床直上・覆土下層から出土しており、古代の土師器134点、須恵器46点、礫3点、縄文時代土器2点など計185点がある。竈・床直上・覆土出土のものを中心にして6点を図示した。

1021～1023は土師器の甕で、1021は「コの字」状口縁の武藏型甕、1022は「コの字」状口縁が少し崩れた武藏型甕、1023は口縁部が短い「くの字」状口縁の甕である。1024・1025は須恵器の坏で、底部の調整技法は何れも回転糸切り後未調整のものである。内底径の大きさから前者は南比企窓跡群編年のHⅧ期に、後者は同編年のHⅩ期に相当する、1026は須恵器の甕胴部の破片で、外面に平行叩き痕と内面に円形の当て具痕をとどめる。

時期 竈・床直上出土の南比企窓跡群編年HⅩ期に相当する須恵器坏や、「コの字」状口縁の武藏型甕などから、武藏国府土器編年のH6期（10世紀前葉～中葉）と考えられる。

V7-SI5 (別表1, 図面15, 図版12)

遺構 L区のV7(41, 23)区に位置する。建物跡の竈に近い北壁部分を北東隅まで1.55m、幅0.50～0.70m検出したが、それ以外の大部分は調査区域外に位置する。建物跡の北東隅部分を搅乱に切られているが、遺存状況は良好である。

平面形は不明で、規模は南北0.70以上×東西1.60以上m、確認面からの深さは32cmほどで、

主軸方位はN—26°—Eである。

覆土は、黒色土・黒褐色土を主体とする4層からなる。

床面は、検出された周辺部が貼り床で、中央付近に硬化面が認められた。周溝は北壁下にはないがそれ以外は不明である。

竈は北壁中央に位置するが、大部分は調査区域外のため詳細は不明である。

掘方は、周辺部分を浅く10cmほど掘り込んでいる。

遺物（別表9、図面35、図版27）

大部分は竈前面の床直上・覆土から出土しており、古代の土師器45点、須恵器35点など計80点がある。床面直上出土のもの2点を図示した。

1027は須恵器の壺で、底部の調整技法は回転糸切り後未調整のものであり、南比企窯跡群編年のHX期に相当する、1028は須恵器の壺の口縁部破片で、直線的な体部・口縁部の特徴から同編年のHX期に相当する。

時期 床直上・掘方出土の南比企窯跡群編年HX期に相当する須恵器壺・壺などから、武藏国府土器編年のH6期（10世紀前葉～中葉）と考えられる。

V7-SI6（別表1、図面16・17、図版13）

遺構 H区のV7（43、29・30）区に位置する。建物跡の竈前面から南壁にかけての部分を検出したが、それ以外の大部分は調査区域外に位置する。遺存状況は良好である。

平面形は不明で、規模は南北2.90以上×東西1.20以上m、確認面からの深さは50cmほどで、主軸方位はN—106°—Eである。

覆土は、黒褐色土・黒色土を主体とする4層からなる。

床面は、全面貼り床で、竈前面を含む建物跡中央付近に硬化面が認められた。周溝は検出された南壁下にはないがそれ以外は不明である。

竈は東壁中央付近に両袖の焚口部分が検出された。凝灰質砂岩（高さ25cm、厚さ10～13cm）を側壁に立て、それ以外は白色砂質粘土で構築していると考えられるが、竈本体は調査区域外にあり詳細は不明である。

掘方は、周辺部分を浅く8cmほど掘り込んでいる。

遺物（別表9、図面35、図版28）

大部分は竈・竈前面の床直上・覆土下層から出土しており、古代の土師器66点、土師質土器8点、須恵器76点、灰釉陶器1点、礫2点、縄文時代の土器2点、石器1点など計156点がある。竈・床直上・覆土出土のものを中心に6点を図示した。

1029・1030は土師器の甕で、何れも台付甕の脚部である。後者は落川・一の宮遺跡編年の第29段階のものと思われる。1031・1032は土師質土器の壺で、前者は厚手の底部の調整技法は回転糸切り後未調整のものであり、落川・一の宮遺跡編年の第29段階と思われる。後者は台状の底部からやや後出か。1033・1034は須恵器の壺で、前者は底部の調整技法が回転糸切り後未調整のものであり、南比企窯跡群編年のHXI期に、後者は調整技法が回転糸切り後周辺回転ヘラ削りのものであり、同編年のHIV期に相当する。

時期 掘方・床直上出土の南比企窯跡群編年HXI期に相当する須恵器壺や、落川・一の宮遺

跡編年第29段階の土師質土器坏などから、武藏国府土器編年のH6期（10世紀前葉～中葉）と考えられる。

2. 掘立柱建物跡

V7-SB1 (別表2, 図面18・19, 図版14～16)

遺構 A区の東端側のV7（40～42, 27～29）区に位置し、調査区域外にある柱穴P1－1を除く残りの全柱穴9基が検出された。遺存状況は良好である。

本遺構は南北棟建物で、南北3間（4.60m）×東西2間（3.90m）である。主軸方位はN－9°－Eである。柱間寸法は南北が北から1.60・1.70・1.30m, 東西が西から2.10・1.80mである。

柱穴9基の内、柱当たりが東側柱列に3基（P3－2～4）、柱抜き取り穴が西側柱列に3基（P1－2～4）と北妻に1基（P2－4）確認された。柱穴掘方は平面形が類円形および楕円形のものが多く、規模は長軸90×短軸50cm, 深さが10～60cmである。柱当たりと柱抜き取り穴の深さは概ね40cm以内に収まり、掘方底面に達しているものは無い。その中で唯一P3－1が深さ10cmで極端に浅い。

掘方覆土は褐色土を含む黒褐色土が主体で、2～3層のものが多い。

遺物 (別表9, 図面35, 図版28)

柱穴P1－2・3・4の柱抜き取り穴と掘方覆土、P3－1・2の柱当たりと掘方覆土から出土しており、古代の土師器57点、須恵器15点、礫1点、縄文土器8点の計81点がある。この内、柱穴P1－2・3・4とP3－2出土のものを6点図示した。

1035は土師器の南武藏型の坏で、鶴間編年の5段階（9世紀後葉～10世紀初頭）に相当する。1036～1038は須恵器の坏で、何れも体部が内湾して口縁部がやや外反する器形と、底部の調整技法が回転糸切り後未調整であることから、南比企窯跡群編年のHVIII期に相当する。1039は須恵器の塊で、口唇部に内傾した平坦面を有し、同編年のHVII期に相当するであろう。1040は須恵器の長頸壺で、口頸部と胴部の接合は二段構成である。同編年のHVII期頃と思われる。

時期 柱抜き取り穴出土の南比企窯跡群編年のHVIII期に相当する須恵器坏から、武藏国府土器編年のH4期（9世紀後半）と考えられる。

V7-SB2 (別表2, 図面20・21, 図版16～18)

遺構 A区の西端側のV7（28～30, 32・33）区に位置し、調査区域外にある建物跡北東部分の柱穴2基（P3－3, P4－3）を除く柱穴8基が検出された。V7-SI2に切られている柱穴P2－3・P4－2や、搅乱により上部を大きく削平されている柱穴P1－2・3があるものの、遺存状況は概ね良好であった。

本遺構は東西棟建物で、南北2間（3.60m）×東西3間（5.40m）である。主軸方位はE－6°－Sである。柱間寸法は南北・東西ともに1.80m等間である。柱穴の南西隅柱（P1－1）と南東隅柱（P1－1）は、掘方の方向が内側に傾く特徴が見られる。

柱穴8基の内、柱当たりは唯一南西隅柱の1基（P1－1）に確認されたが、それ以外は柱抜き取り穴が確認された。柱穴掘方の平面形は長方形の1基（P4－1）を除き概ね類円

形である。規模は長軸 80 × 短軸 40 cm, 深さが 30 ~ 70 cm である。柱穴 P 1 - 1 の柱当たりの深さは 55 cm で掘方底面に近いが、柱抜き取り穴の深さは掘方底面より深くなる（最大 70 cm）傾向が見られる。

掘方覆土は褐色土を含む黒褐色土が主体で、1 ~ 3 層とばらつきがある。

遺物 柱穴 P 1 - 1・3 の柱抜き取り穴と掘方覆土、P 2 - 3 の柱抜き取り穴、P 3 - 1 の柱抜き取り穴と掘方覆土、P 4 - 1・2 の柱抜き取り穴と掘方覆土などから、古代の土師器 13 点、須恵器 16 点、縄文土器 3 点の計 32 点が出土しているが、図示できるものは無い。

時期 本遺構は V 7 - S I 2 (A ~ C 期) と重複関係にあり、武藏国府土器編年の H 3 期（9 世紀中葉）の S I 2 C 期より古く位置づけられることから、同編年の H 3 期（9 世紀中葉）以前と考えられる。

V 7 - S B 3 (別表 2, 図面 22, 図版 18・19)

遺構 調査開始当初の古代遺構確認段階では、調査区の北境に位置した柱穴 P 2 - 3 が搅乱と重複していたために柱穴の存在に気が付かず、縄文時代遺構の確認段階で初めて柱穴の存在が明らかになると同時に掘立柱建物跡の存在も明らかになったものである。

A 区の中央部の V 7 (35 ~ 37, 29 ~ 31) 区に位置し、搅乱により消失した南東隅柱穴 P 3 - 1 を除く残りの全柱穴 7 基が検出された。この内、柱穴 P 2 - 1 は V 7 - S I 4 を切つており、柱穴 P 1 - 1 は V 7 - P 5 - 034 に、柱穴 P 1 - 3 は V 7 - S K 16 に切られているが、遺存状況は概ね良好である。

本遺構は東西棟建物で、南北 2 間 (3.60 m), 東西 2 間 (5.00 m) である。主軸方位は E - 8° - S である。柱間寸法は南北が 1.80 m 等間、東西が西から 2.70・2.30 m である。搅乱で消失した南東隅柱穴を除く残りの 3 隅柱穴 (P 1 - 1・3, P 3 - 3) は、掘方の方向が内側に傾く特徴が見られる。

柱穴 7 基は、柱当たりが確認できたものは無く、全て掘方覆土のみが確認された。柱穴掘方は平面形が楕円形および隅丸方形のものが多く、規模は長軸 80 × 短軸 60 cm, 深さが 23 ~ 42 cm である。掘方覆土は褐色土を含む黑色土・黒褐色土が主体で、2 層のものが多い。

遺物 (別表 9, 図面 36, 図版 28)

柱穴 P 1 - 1・3, P 2 - 1・3, P 3 - 2 などの掘方覆土から出土しており、古代の土師器 10 点、須恵器 3 点、灰釉陶器 2 点、縄文土器 1 点の計 16 点がある。この内、柱穴 P 2 - 1 と P 3 - 2 出土のものを 2 点図示した。

1041 は須恵器大甕の頸部～胴上部にかけての破片で、外面に平行叩き痕、内面に同心円文の当て具痕をとどめる。1042 は灰釉陶器の短頸壺で、胴上部に突帯文が一周し、一部が膨らんで耳を有すると考えられる。K - 90 様式（9 世紀後半）と思われる。

時期 本遺構は V 7 - S I 4 と重複関係にあり、武藏国府土器編年の H 6 期（10 世紀前葉～中葉）の S I 4 より新しく位置づけられることから、同編年の H 6 期（10 世紀前葉～中葉）以降と考えられる。

3. 墳墓

V 7-S Z 4 (別表 3, 図面 23・24, 図版 20)

遺構 本遺構は、バックホーで古代遺構の検出作業中に、A区の北壁面から拳大の円礫と土師器甕の破片が出土したことで偶然に発見されたものである。壁面の観察により調査区域外に大小の円礫に囲まれた土師器甕の骨蔵器を埋納した火葬墓（石囲い火葬墓と仮称する）と判断されたが、調査区域外に位置することから事業者の協力を得て拡張調査を行った。

本遺構はA区のV 7 (33, 31) 区に位置し、古代遺構の検出作業中にごく一部が壊れた状態で検出されたが、断面観察から土坑がⅡa層の下部からⅢ層まで掘り込まれていることを明確に捉えることができた。土坑上面付近には墓標などは無く、土坑全体をやや大きめのものを含む33個の円礫で覆っており、土師器甕破片4点も混在していた（図面23, 図版20）。円礫が土坑外の北西側に広がっており、北側の一群に9世紀代の須恵器坏底部小破片が含まれることから、遺構上面は早い段階から搅乱を受けていると思われる。遺存状態は良好である。

土坑の平面形は橜円形で、規模は長軸57.5×短軸45.5cm、確認面からの深さは28.0cmである。この土坑底部の中央に一回り大きくてやや扁平な台石（重量4,250g）を置き、これを覆うように土師器甕を転用した骨蔵器が口縁部を下に倒位で置かれ、その周囲を大小の円礫で覆うものであった。円礫の総数は119個で、総重量は49.02kgであった（第8表）。100～200gのものが最も多く全体の3割ほど（29.41%）を占め、この前後の100g以下・200～300gを含めると全体の6割強（63.03%）となる。

骨蔵器の土師器甕は口縁部から胴上半部にかけての部分（骨蔵器上半部）が台石上に遺存しており、この内部には火葬骨が台石に接するように少量認められた（第2層）。骨蔵器上半部と台石の間には底板状のものは無かったと思われる。これより上方（第1層を含む）に甕胴下半部から底部にかけての部分（骨蔵器下半部）の破碎された破片と、同様に破碎された須恵器坏の破片などの大部分が混在して出土している。土坑内の円礫の隙間は軟質の黒色土が主体の単層からなる。なお、甕内部の焼骨と土壤は全て取り上げ自然科学分析を行った（第3章）。

遺物（別表9, 図面36, 図版29）

古代の土師器5点、須恵器3点、礫（川原石）119点の計127点がある。この内土坑内から出土した骨蔵器の土師器甕および須恵器坏2点を図示した。

1043は「くの字」状口縁の武藏型甕を転用した骨蔵器で、胴上部の膨らみが口縁端部とほぼ同じである。口縁端から8.7cm下方の胴上部に穿孔（1.5×2.0cm）が1箇所、破碎時の破碎痕が底部中央、底部上方9.5cmと15.0cmの胴下部の計3箇所に認められる。この破碎の打撃はこれ以外にも加えられたようで、口縁部の下方17.5cm付近で骨蔵器上半部と骨蔵器下半部の上下に二分されている。なお、破碎された甕の破片は未接合の胴部破片30個を除くと全体の11%ほどが見つかっていないことから（図版29）、土坑からやや離れた場所で破碎が行われたと推察される。また、この甕は外面に煤の付着もなく、使用痕跡が見られないものである。

1044の須恵器坏は、底部の調整技法は底部は回転全面ヘラ削り後外周を斜めに手持ちヘラ削りするもので、内面に爪先技法がわずかに見られる。内底径も8.2～8.3cmとやや大きく南比企窯跡群編年のHⅢ期の後葉に相当するであろう。この坏も破碎されており全体の1/2

弱ほどが見つかっていない。恐らく供膳具として使用されたものであろう。

自然科学分析の骨同定を行った焼骨は、頭蓋骨・上顎骨・下顎骨・四肢骨などの各部位が確認されたものの、破片数も少なく明らかに人と判断できる部位も検出されなかつたが、埋葬状況から人の焼骨と判断された。また、骨蔵器内採取の土壤について微細物調査を行った結果、野生種のイネ科の炭化種実2個（果実1個、穎果1個）、動物遺存体1個（魚類の鱗）、貝類の腹足綱（巻貝）の殻1個などが検出されている。特に魚類の鱗と巻貝の殻は焼けていないことから、供膳具（須恵器坏）に盛られた供物の可能性がある。

時期 出土した武藏型の土師器甕および南比企窯跡群編年のHⅢ期後葉に相当する須恵器坏から、武藏国府土器編年のN4期（8世紀後葉）の前半と考えられる。

第8表 V7-SZ4出土円礫集計表

石質別集計

遺構名	SZ4上層		SZ4中層		SZ4下層		SZ4一括		総計	
	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)
	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)	比率(%)
石材 砂岩	28	8,340.7	25	11,957.4	37	15,882.9	8	5,126.8	98	41,307.8
	82.4	72.4	73.5	88.8	88.1	84.9	88.9	96.1	82.4	84.3
チャート	3	1,859.4	3	634.8	4	2,636.2	1	210.4	11	5,340.8
	8.8	16.1	8.8	4.7	9.5	14.1	11.1	3.9	9.2	10.9
泥岩	3	1,319.3	5	522.0	1	180.3	—	—	9	2,021.6
	8.8	11.5	14.7	3.9	2.4	1.0	0.0	0.0	7.6	4.1
閃緑岩	—	—	1	349.8	—	—	—	—	1	349.8
	0.0	0.0	2.9	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.7
総計	34	11,519.4	34	13,464.0	42	18,699.4	9	5,337.2	119	49,020.0

重量別集計

遺構名 重量	SZ4上層		SZ4中層		SZ4下層		SZ4一括		総計	
	個数	比率(%)	個数	比率(%)	個数	比率(%)	個数	比率(%)	個数	比率(%)
100g以下	5	14.7	5	14.7	9	21.4	2	22.2	21	17.6
100.1~200g	7	20.6	12	35.3	14	33.3	2	22.2	35	29.4
200.1~300g	7	20.6	7	20.6	4	9.5	1	11.1	19	16.0
300.1~400g	4	11.8	1	2.9	1	2.4	1	11.1	7	5.9
400.1~500g	3	8.8	2	5.9	2	4.8			7	5.9
500.1~600g	2	5.9	1	2.9	2	4.8	1	11.1	6	5.0
600.1~700g	2	5.9			1	2.4			3	2.5
700.1~800g	3	8.8	1	2.9	2	4.8			6	5.0
800.1~900g			1	2.9	3	7.1			4	3.4
900.1~1000g	1	2.9			1	2.4			2	1.7
1000.1g以上			4	11.8	3	7.1	2	22.2	9	7.6
総計	34		34		42		9		119	

4. 土坑

V 7 - SK 15 (別表 5, 図面 24, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (32・33, 30) 区に位置し, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は楕円形で, 規模は長軸 1.20 × 短軸 0.75 m, 確認面からの深さは 0.56 m である。

覆土は黒色土を主体とする 3 層からなる。

遺物 (別表 9, 図面 37, 図版 29)

唯一の遺物である古代の土師器壺 1 点を図示した。

1045 は南武藏型の壺で, 鶴間編年の 5 段階 (9 世紀後葉～10 世紀初頭) に相当する。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 16 (別表 5, 図面 24, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (35, 30・31) 区に位置する。V 7 - SB 3 P 1 - 3 の上部を切っており, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は類円形で, 規模は径 1.32 m, 確認面からの深さは 0.14 m である。

覆土は単層で黒色土を主体とする。

遺物 古代の土師器 1 点が出土しているが, 図示できるものではない。

時期 本遺構は V 7 - SB 3 と重複関係にあり, 武藏国府土器編年の H 6 期 (10 世紀前葉～中葉) の V 7 - SB 3 より新しく位置づけられることから, 同編年の H 6 期 (10 世紀前葉～中葉) 以降と考えられる。

V 7 - SK 17 (別表 5, 図面 24, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (33・34, 29・30) 区に位置し, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は楕円形で, 規模は長軸 0.87 × 短軸 0.55 m, 確認面からの深さは 0.50 m である。

覆土は黒色土を主体とする 3 層からなる。

遺物 古代の須恵器 1 点が出土しているが, 図示できるものではない。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 18 (別表 5, 図面 24, 図版 21)

遺構 J区のV 7 (32, 29・30) 区に位置し, 北・西側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は類円形で, 規模は南北 0.84 以上 × 東西 0.89 以上 m, 確認面からの深さは 0.30 m である。

覆土は黒色土を主体とする 2 層からなる。

遺物 古代の土師器 1 点が出土しているが, 図示できるものではない。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 23 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (44, 28・29) 区に位置し, 北西側は大部分が調査区域外にある。南東隅でV 7 - P 5 - 033 を切っているが, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は円形で, 規模は径 0.95 以上m, 確認面からの深さは 0.42 mである。

覆土は単層で黒色土を主体とする。

遺物 古代の土師器 4 点, 須恵器 2 点の計 6 点が出土しているが, 図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 24 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 B区のV 7 (44, 28) 区に位置し, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は円形で, 規模は径 1.10 ~ 1.14 m, 確認面からの深さは 0.20 mである。

覆土は単層で黒色土を主体とする。

遺物 (別表 9, 図面 37, 図版 29)

土師器 1 点, 須恵器 2 点の計 3 点が出土しており, 土師器坏 1 点を図示した。

1046 は南武藏型の坏で, 鶴間編年の 5 段階 (9 世紀後葉~10 世紀初頭) に相当する。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 25 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (29・30, 31) 区に位置し, 南側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は梢円形で, 規模は長軸 1.07 × 短軸 0.62 以上m, 確認面からの深さは 0.28 m である。

覆土は黒褐色土と黒色土の 2 層からなる。

遺物 古代の土師器 5 点, 須恵器 9 点の計 14 点が出土しているが, 図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 26 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (29, 31) 区に位置し, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸方形で, 規模は南北 1.12 × 東西 1.08 m, 確認面からの深さは 0.60 m である。

覆土は黒褐色土と黒色土の 2 層からなる

遺物 (別表 9, 図面 37, 図版 29)

古代の土師器 2 点, 須恵器 8 点の計 10 点が出土しており, 須恵器 2 点を図示した。

1047 は須恵器の坏で, 内底の復元径が 8 cm と大きく, 底部の調整技法も全面回転ヘラ削りと考えられることからすると南比企窯跡群編年のH III 期に相当するであろう。1048 は甕の胴部片で, 外面に平行叩き痕, 内面に同心円文の当て具痕をとどめる。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 27 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (29, 31) 区に位置し, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は不整橢円形で, 規模は長軸 0.56 × 短軸 0.40 m, 確認面からの深さは 0.26 m である。

覆土は黒色土と褐色土の2層からなる。

遺物 古代の土師器1点, 須恵器1点の計2点が出土しているが, 図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 28 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (28・29, 31) 区に位置し, 南側の一部が調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は不整橢円形で, 規模は長軸 1.18 × 短軸 0.58 m, 確認面からの深さは 0.50 m である。

覆土は黒褐色土を主体とする2層からなる。

遺物 (別表 9, 図面 37, 図版 29)

古代の須恵器1点, 灰釉陶器1点, 繩文土器1点の計3点が出土しており, 灰釉陶器1点を図示した。

1049 は須恵器の長頸壺の底部である。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 29 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 J区のV 7 (32, 29) 区に位置し, 東側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸長方形で, 規模は南北 0.64 × 東西 0.65 以上m, 確認面からの深さは 0.64 m である。

覆土は黒色土を主体とする2層からなる。

遺物 (別表 9, 図面 37, 図版 30)

古代の須恵器4点が出土しており, 壊2点を図示した。

底部の調整技法は 1050 が底部回転糸切り後未調整, 1051 は底部回転全面ヘラ削りの壊で, 前者は南比企窓跡群編年のHⅦ期に, 後者は同編年のHⅢ期に相当するであろう。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 31 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 K区のV 7 (32・33, 28) 区に位置し, 西側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸長方形で, 規模は南北 0.83 以上 × 東西 0.25 以上m, 確認面からの深さは 0.43 m である。

覆土は単層で黒色土を主体とする。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 古代と考えられるが判然としない。

V 7 - SK 32 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (30, 30・31) 区に位置し, 南側は調査区外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸方形で, 規模は南北 0.48 以上 × 東西 0.64 以上m, 確認面からの深さは 0.50 m である。

覆土は黒色土を主体とする 3 層からなる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 古代と考えられるが判然としない。

V 7 - SK 33 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (30, 31) 区に位置し, 遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は類円形で, 規模は南北 0.64 × 東西 0.72 m, 確認面からの深さは 0.22 m である。

覆土は単層で黒褐色土を主体とする。

遺物 (別表 9, 図面 37, 図版 30)

古代の土師器 5 点, 須恵器 3 点の計 8 点が出土しており, 須恵器坏 2 点を図示した。

1052 は底部の調整技法が回転糸切り後未調整の底部片, 1053 は体部から口縁部にかけての破片で, 前者は南比企窯跡群編年のHⅦ期に, 後者は同編年のHⅧ期に相当するであろう。

時期 古代と考えられる。

V 7 - SK 34 (別表 5, 図面 25, 図版 21)

遺構 A区のV 7 (30, 32) 区に位置し, 東側で V 7 - P 5 - 024 を切り, 北側で V 7 - P 5 - 023 に切られる。遺存状態はやや不良である。

本遺構の平面形は橢円形で, 規模は長軸 1.07 × 短軸 0.83 m, 確認面からの深さは 0.30 m である。

覆土は単層で黒褐色土を主体とする。

遺物 古代の土師器 4 点, 須恵器 5 点の計 9 点が出土しているが, 図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

5. 溝

V 7 - SD 3 (別表 4, 図面 26, 図版 22)

遺構 B区北側のV 7 (44・45, 30) 区に位置し, 遺存状態は良好である。本調査地区の東に隣接する第 683 次調査地区(『概報 36』)で検出された東西溝のV 7 - SD 1 = V 8 - SD 8 (本調査地区検出 SD 3 の東方 30.0 m 付近に溝東端が検出されている) の西延長に当たり, 同一の溝と考えられる。

溝は, 断面観察から上下に 2 時期の変遷が推定される(古期を B 期, 新期を A 期とする)。規模は, 下部の B 期で長さ 0.76 m 以上, 上幅 1.45 ~ 1.64 m, 下幅 0.22 ~ 0.36 m, 確認面からの深さ 0.70 m を測り, 断面形は薬研堀状である。上部の A 期は上幅 0.95 m, 下幅 0.40 m, 確認面からの深さ 0.43 m を測り, 断面形は U 字状である。なお, 当溝の西延長は西端の C 区

では検出されていないので、可能性として①本調査地区内で止まる、②本調査地区内で北折し、本調査地区北端のB区とC区の未調査部分を通過するの二通りが考えられる。

遺物 古代の土師器8点、須恵器1点、礫2点の計11点が出土しているが、図示できるものは無い。

時期 土器は細片で時期は不明である。しかしながら、B期の薬研堀状の断面形から中世に属する可能性が高いと考えられる。

6. その他の遺構

V 7-S X 13 (別表6, 図面26, 図版21)

遺構 A区のV 7 (31・30) 区に位置し、北端をV 7-P 5-011に切られているが、遺存状態は良好である。柱穴の可能性がある。

本遺構の平面形は不整橢円形で、規模は長軸0.90×短軸0.78m、確認面からの深さは0.48mである。

覆土は黒褐色土を主体とする3層からなり、特に下部2層はよく締まり硬質で、柱穴掘方覆土の可能性がある。

遺物 (別表9, 図面38, 図版30)

古代の土師器4点、須恵器13点の計17点が出土しており、須恵器2点を図示した。

底部の調整技法は1054が回転糸切り後未調整の坏で、1055は回転糸切り後周辺回転ヘラ削りの塊である。前者は南比企窯跡群編年のHIV期に、後者は同編年のHVII期に相当するであろう。

時期 古代と考えられる。

V 7-S X 14 (別表6, 図面26, 図版21)

遺構 A区のV 7 (28, 31) 区に位置し、柱穴で遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸方形で、規模は南北0.86×東西0.83m、確認面からの深さは0.52～0.60mである。

覆土は黒褐色土の柱当たりとよく締まり硬質の掘方覆土3層が確認されることから柱穴と判断される。なお、柱当たりには拳大の礫9個(砂岩質7個)が詰め込まれていたが、最大のものは長さ20.2cm、幅7.6cm、厚さ6.4cm、重量1,497g、最小のものは長さ8.0cm、幅4.5cm、厚さ2.9cm、重量215gである。

遺物 古代の土師器1点、須恵器5点、礫9点の計15点が出土しているが、図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

V 7-S X 15 (別表6, 図面26, 図版21)

遺構 C区のV 7 (27・28, 31) 区に位置し、柱穴で遺存状態は良好である。

本遺構の平面形はL字形で、規模は南北0.77×東西0.87m、確認面からの深さは0.57mである。

覆土は黒褐色土の柱抜き取り穴とよく締まり硬質の掘方覆土1層が確認されることから柱

穴と判断される。

遺物 (別表 9, 図面 38, 図版 30)

古代の須恵器 4 点が出土しており、須恵器坏 1 点を図示した。

1056 は口縁部が内湾してやや肥厚する。

時期 古代と考えられる。

V 7-S X 16 (別表 6, 図面 26, 図版 21)

遺構 C 区の V 7 (27・28, 32) 区に位置し、柱穴で遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸方形で、規模は南北 0.75 × 東西 0.63 m, 確認面からの深さは 0.42 ~ 0.50 m である。

覆土は黒褐色土の柱抜き取り穴とよく締まり硬質の掘方覆土 1 層が確認されることから柱穴と判断される。

本遺構は同様に柱穴と判断される S X 14 と S X 15 とほぼ同規模であり、L 字形の S X 15 は掘立柱建物の隅柱と共通することから、3 柱穴はかぎ型になる柵の可能性が考えられる。

遺物 古代の須恵器 3 点が出土しているが、図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

V 7-S X 17 (別表 6, 図面 26, 図版 21)

遺構 C 区の V 7 (27, 29・30) 区に位置し、東・南が調査区域外にある。柱穴で遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は隅丸方形と思われるが、規模は南北 0.39 以上 × 東西 0.39 以上 m, 確認面からの深さは 0.62 ~ 0.68 m である。

覆土は黒褐色土の柱抜き取り穴とよく締まり硬質の掘方覆土 4 層が確認され、さらに柱抜き取り穴の底面に柱圧痕が見られる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 古代と考えられるが、判然としない。

V 7-S X 18 (別表 6, 図面 26, 図版 21)

遺構 G 区の V 7 (40・31) に位置し、北・東が調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は不明で、規模は南北 1.05 × 東西 0.42 m, 確認面からの深さは 0.32 ~ 0.38 m である。

覆土は黒褐色土を主体とする 3 層からなるが、下部 2 層は褐色土ブロックを混じる黒色土と黄褐色土（ローム土）であり、掘方と考えられることから竪穴建物跡の可能性が高い。

遺物 古代の土師器 2 点、須恵器 2 点の計 4 点が出土しているが、図示できるものは無い。

時期 古代と考えられる。

V 7-S X 20 (別表 6, 図面 26, 図版 21)

遺構 I 区の V 7 (30, 30) 区に位置し、東側は調査区域外にある。遺存状態は良好である。

本遺構の平面形は楕円形で、規模は長軸 0.65 以上×短軸 0.40 以上m、確認面からの深さは 0.70 m である。

覆土は黒色土と黒褐色土の 2 層からなる。

遺物 本遺構に伴う遺物は出土していない。

時期 古代と考えられるが、判然としない。

7. 小穴

V 7-P 5-001～034・036・037・039 の計 38 基が検出され、その多くは A 区 S B 3 西妻より西側に分布している。

平面形は楕円形が全体の 2/3 弱を占め、規模は長軸 31～75 cm × 短軸 30～60 cm、深さ 14～54 cm である。残りの円形は規模が径 28～60 cm、深さ 10～73 cm である。

覆土は、黒色土または黒褐色土の単層が大部分を占める。

遺物 (別表 9, 図面 38, 図版 30)

V 7-P 5-001・005・008～010・016・018～020・023～025・031～033・037・039 から、古代の土師器 12 点、土師質土器 1 点、須恵器 15 点、それに縄文土器 8 点、石器 1 点、礫 2 点の計 39 点が出土しており、時期は古代と考えられる。その中で V 7-P 5-024 出土の須恵器塊 1 点を図示した。

1057 は底部に回転糸切り痕をとどめる高台付の塊で、武藏国府土器編年の H 5 期（9 世紀末）頃に相当すると思われる。

8. 遺構外出土遺物 (別表 9, 図面 38, 図版 30)

試掘調査 (44 点) および遺構外から出土した遺物は土師器 129 点、土師質土器 3 点、須恵器 131 点、灰釉陶器 5 点、近世陶器 3 点、礫 1 点の計 275 点が出土しているが時期不明のものが多く、表土出土の 8 点を図示した。

1058 は土師質土器の坏で、台状の底部の調整技法は回転糸切り後未調整のものである。落川・一の宮遺跡編年の第 32 段階の土師質土器 i タイプに当たり (福田健司 2002・2017), 武藏国府土器編年の H 8 期 (10 世紀末～11 世紀初頭) に相当する。1059～1061 は須恵器の坏で、底部の調整技法は全て回転糸切り後未調整のものである。内底径の違いから 1059・1060 は南北企窓跡群編年の H VI 期=武藏国府土器編年の H 2 期 (9 世紀前葉) に、1061 は同編年の H VIII 期=武藏国府土器編年の H 4 期 (9 世紀後葉) に相当するであろう。1062・1063 は須恵器の塊で、前者は口唇部に内傾した平坦面があり同編年の H VII 期=武藏国府土器編年の H 3 期 (9 世紀中葉) 頃、後者は底部回転糸切り未調整で、同編年の H VIII 期=武藏国府土器編年の H 4 期 (9 世紀第四半期) と思われる。1064 は大型の須恵器甕破片で、外面に平行叩き痕、内面に同心円文の当て具痕をとどめる。1065 は灰釉陶器の塊で、内外面のハケ塗り施釉と三日月高台から K-90 号窯式 (9 世紀後半) と考えられる。

第3章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
管理者 赤堀 岳人
担当者 赤堀 岳人
分析者 金井 慎司
松元 美由紀

はじめに

武蔵国府関連遺跡は、東京都府中市宮町の大國魂神社を中心に武蔵野台地と一部沖積低地に広がり、1975年以降、多数の発掘調査が実施されている。第1964次調査（白糸台地域）では、8世紀第3四半期前半とされる石囲い火葬墓が検出されている。

本分析調査では、この石囲い火葬墓から出土した骨について鑑定を行う。また、火葬墓内の土壤を対象に微細物分析を行い、植物の供献等に係る情報を得ることにした。

1. 骨同定

(1) 試料

試料は、第1964次調査で検出された石囲い火葬墓（V7-SZ4）中の骨蔵器内から採取した土壤および、骨（1/3）、骨（2/3）、骨（3/3）から抽出された骨試料である。各試料は骨（1/3）が19.93g、骨（2/3）が17.63g、骨（3/3）が86.11gである。

(2) 分析方法

試料を乾燥させた後、骨に付着する泥分を硬い刷毛等で除去する。骨を肉眼および実体顕微鏡で観察し、形態的特徴から種・部位を特定し、数・重量を計測する。

(3) 結果

結果を第9表に示す。検出された骨は、いずれも白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じるなど、焼骨の特徴を残す。

第9表 骨同定結果

試料	種類	部位	状態等	数	重量(g)	備考
241 V7-SZ4 骨(1/3)	哺乳類	頭蓋骨	破片	1	1.17	焼骨
		上顎骨 / 下顎骨	破片	1	1.12	焼骨
		不明	破片	64	16.62	焼骨
	残渣				1.01	
241 V7-SZ4 骨(2/3)	哺乳類	頭蓋骨	破片	1	1.63	焼骨
		四肢骨	破片	3	6.22	焼骨
		不明	破片	45	8.96	焼骨
	残渣				0.82	
241 V7-SZ4 骨(3/3)	哺乳類	頭蓋骨？	破片	2	2.10	焼骨
		上顎骨 / 下顎骨	破片	3	2.07	焼骨
		四肢骨	破片	6	12.56	焼骨
		不明	破片	253	66.16	焼骨
	残渣				3.22	

各試料からは、骨（1/3）で哺乳類の頭蓋骨・上顎骨／下顎骨・部位不明破片が、骨（2/3）で哺乳類の頭蓋骨・四肢骨・部位不明破片が、骨（3/3）で哺乳類の頭蓋骨の可能性がある破片・上顎骨／下顎骨・四肢骨・部位不明破片が確認される。

（4）考察

8世紀第3四半期前半とされる石囲い火葬墓（V 7-S Z 4）からは、焼けた骨が検出された。いずれも白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じている。人骨の場合であるが、Shipmanほか（1984）、Mays（1998）などを参考とすると、約650°C以上で焼かれた場合、骨が白色に変化するとされている。このことから、ここで検出された骨は約650°C以上で焼かれたものと考えられる。

検出された骨は、3試料合計で379点（118.61g），確認された部位が頭蓋骨、上顎骨／下顎骨、四肢骨などである。

なお、武蔵国府関連遺跡の既往調査（V 10-S Z 2）では、骨蔵器に納められた骨（570g）の内、頭蓋骨（71g）、椎骨肋骨（34g）、四肢骨（278g）が確認され、左上顎第3大臼歯歯根部から成人1体の火葬人骨の骨が埋葬されていることが明らかにされている。一方で、本調査区で出土した骨は、破片数も少なく、年齢・性別を判断できる部位は検出されなかった。明らかにヒトと判断できる部位も検出されないが、遺構の構造や埋葬状況などの現地調査所見から考えて、ヒトである可能性は高い。

なお、後述する微細物分析では、試料中から焼けていない魚類の鱗が検出されている。食料残滓の混入もしくは、供献物に由来する可能性が考えられる。

2. 微細物分析

（1）試料

試料は、第1964次調査で検出された石囲い火葬墓（V 7-S Z 4）中の骨蔵器内より採取された土壌1点である。尚、土壌試料は骨（1/3）、骨（2/3）、骨（3/3）に分けて採取されている。

（2）分析方法

骨（1/3）の試料全量711.4gと、骨（2/3）の試料288.6gの、合計1000gを常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約20回）。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を、それぞれ粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmの篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。水洗・乾燥後の試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実や動物遺存体を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や中山ほか（2010）、鈴木ほか（2018）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、写真を添付して同定根拠とする。動物遺存

体は、別項にて詳細を述べる。

炭化材（主に2mm以上）は重量と最大径、土器片は個数、重量、最大径、焼土（土器片？）と剥片？は個数と重量を求めて一覧表に併記する。分析残渣は、炭化材主体と砂礫主体の粒径別重量を一覧表に併記する。

分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

（3）結果

結果を第10表に示す。石囲い火葬墓（V7-SZ4）中の骨蔵器内より採取された土壤1kgを洗い出した結果、炭化種実2個、不明炭化物2個、炭化材0.18g（最大8.6mm）、炭化材主体0.58g、動物遺存体、焼土（土器片？）34個0.64g、土器片4個1.73g（最大26.4mm）、剥片？1個0.02g、非炭化の枝条1個、種実1個、植物片0.61g、岩片・土粒類9.08gが確認された。なお、非炭化植物には、ヒノキの枝条とイネ科の果実等も確認されたが、非炭化であることから、後代の混入と判断されるため、考察より除外する。

炭化種実は、草本のイネ科の果実1個、穎果1個に同定された。栽培植物のイネやキビ、アワ、栽培の可能性があるヒエ属等の形状とは区別され、野生種と考えられる。

第10表 微細物分析結果

分類群・部位・状態・粒径	241		備考	
	V7-SZ4			
	骨(1/3)	(2/3)		
炭化種実				
イネ科	果実	完形	1(個)	
	穎果	完形	1(個)、分析中破損	
不明炭化物				
		破片	2(個)	
炭化材				
			8.57 最大径 (mm)	
	>4mm		0.09 乾重 (g)	
	4-2mm		0.09 乾重 (g)	
炭化材主体				
	2-1mm		0.16 乾重 (g)	
	1-0.5mm		0.42 乾重 (g)	
貝類				
腹足綱	2-1mm		1(0.003g)(個)/乾重(g)	
骨類				
魚類(鱗)	4-2mm		1(0.003g)(個)/乾重(g)	
焼骨	>4mm		40(4.40g)(個)/乾重(g)	
	4-2mm		多数(6.89g)(個)/乾重(g)	
	2-1mm		多数(3.24g)(個)/乾重(g)	
焼土(土器片?)				
	4-2mm		34(0.64g)(個)/乾重(g)	
土器片				
			1.73 乾重(g)	
			4(個)	
			26.39 最大径 (mm)	
剥片?				
	4-2mm		1(0.02g)(個)/乾重(g)	
非炭化植物				
ヒノキ	枝条	完形	1(個)	
イネ科	果実	破片	1(個)	
非炭化植物片				
			0.61 乾重(g)	
砂礫主体				
	>4mm		0.55 乾重(g)	
	4-2mm		1.24 乾重(g)	
	2-1mm		5.04 乾重(g)	
	1-0.5mm		2.26 乾重(g)	
分析量				
			1000 湿重(g)	

注) 骨(1/3) 全量 711.4g + 骨(2/3) 288.6g、合計 1,000g を水洗

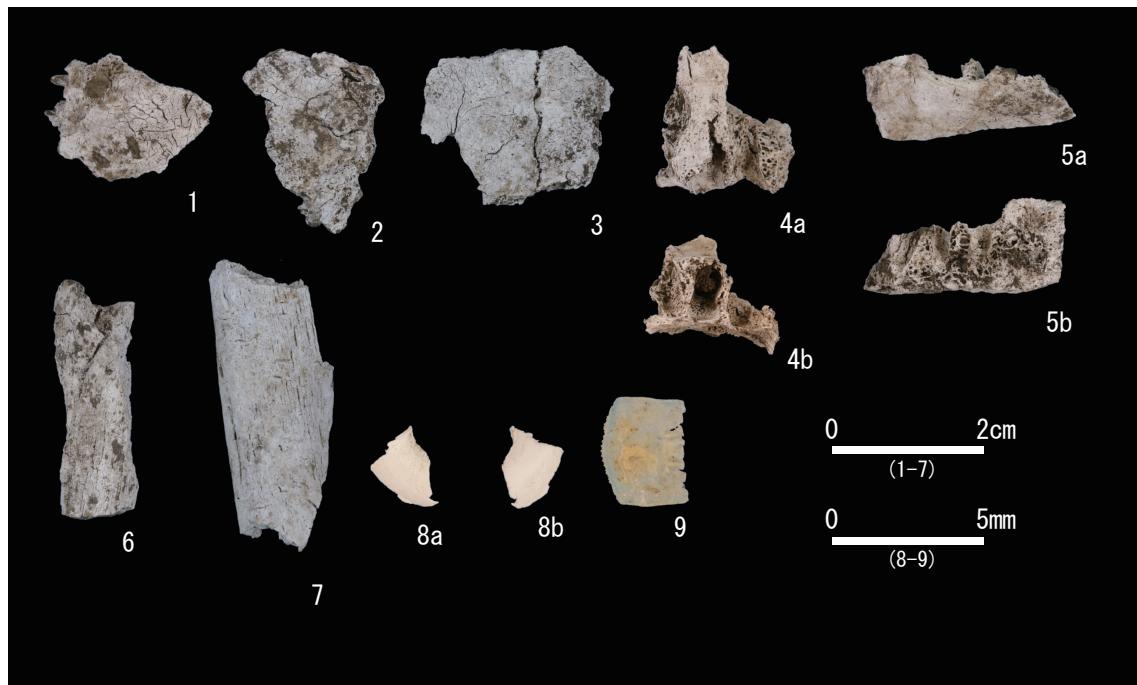
(4) 考察

微細物分析の結果、石囲い火葬墓（V 7 – S Z 4）中の骨蔵器内より採取された土壤からイネ科の炭化種実が検出された。調査区周辺の草地に生育していたと考えられ、何らかの理由により火を受けたとみなされる。動物遺体については先述のように魚類の鱗である。

引用・参考文献

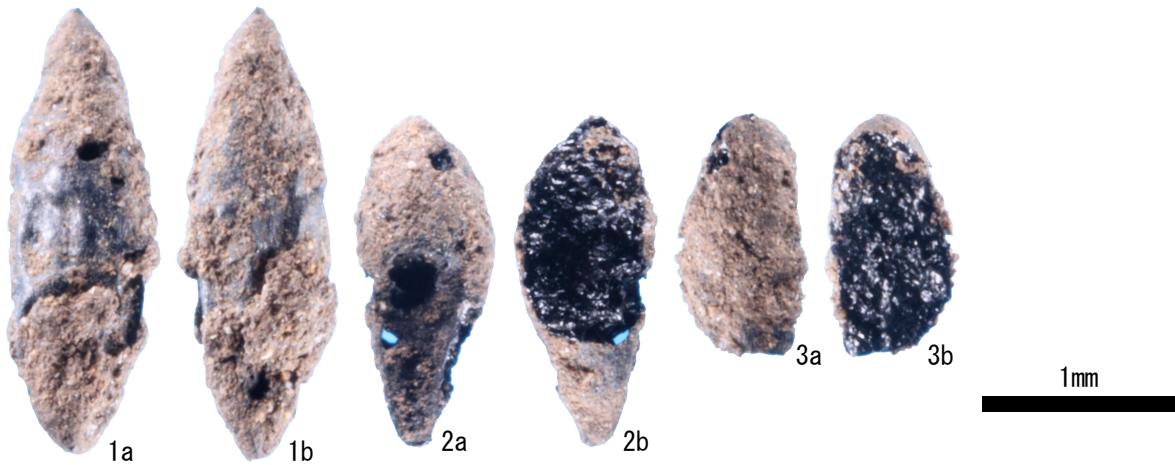
- Mays S., 1998, The Archaeology of Human Bones. Routledge.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑（2010年改訂版）. 東北大学出版会, 678p.
- Shipman, P., Foster, G., Schoeninger, M., 1984, Burnt Bones and Teeth. An Experimental Study of color, Morphology, Crystall Structure and Shrinkage. Journal of Archaeological Science 2.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる 734 種 増補改訂－. ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.

写真1 出土骨貝類



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. 哺乳類 頭蓋骨 ; SZ4骨 (1/3) | 2. 哺乳類 頭蓋骨 ; SZ4骨 (2/3) |
| 3. 哺乳類 頭蓋骨? ; SZ4骨 (3/3) | 4. 哺乳類 上顎骨/下顎骨 ; SZ4骨 (1/3) |
| 5. 哺乳類 上顎骨/下顎骨 ; SZ4骨 (3/3) | 6. 哺乳類 四肢骨 ; SZ4骨 (2/3) |
| 7. 哺乳類 四肢骨 ; SZ4骨 (3/3) | 8. 腹足綱 賦 ; SZ4骨 (1/3) (2/3) |
| 9. 魚類 鱗 ; SZ4骨 (1/3) (2/3) | |

写真2 炭化種実



- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. イネ科 果実 (241 V7-5; SZ4) | 2. イネ科 穎果 (241 V7-5; SZ4) |
| 3. イネ科 穎果 (241 V7-5; SZ4) | |